
Fate/stay nightーーーとある運命の物語

瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y n i g h t ー とある運命の物語

【Nコード】

N5002U

【作者名】

瞬

【あらすじ】

あの大火災で士郎は『イレギュラー』ー服部武蔵という少年と出会う

それから二人は親友になり、数年過ぎたころ再び『聖杯戦争』に巻き込まれる

しかし、士郎はセイバー以外に『マスター』というイレギュラーサーヴァントを、武蔵は槍兵二人を召喚する

イレギュラーが起こる聖杯戦争はどうなっていくのか

この作品は、スピノフですが、これからでも読めると思います

第一話、始まりの日、昼編

side ? ? 士郎

目を覚ました

それと同時に、体が固まっているのが分かる

……また俺は土倉で眠っていたのか

最近めっきり気温が下がり、寒さから身を守るために毛布を持ち込んではいる

しかし所詮はただの薄い布でしかないため完全に凌ぐまでの効力は発揮できずスッカリ体が冷え切ってしまった

朝からこんな状態か……結構きついな

ボーっとしている頭を揺すりながら起きようとしていると、何者かによって土倉の扉が開かれた

とは言っても、誰が開けたのかはすぐ分かる

この時間に入ってくる奴は桜か、そうでなければ……

「おーい、いい加減起きろや。桜がもう朝飯作っちゃったぞ」

「う……うーん……よお 武蔵」

「まったく。あんまり土倉で寝んなよ。寝違えたりすんだからさ」

「ああ、気をつける」

「とは言っても、あんまりその忠告は聞いてはくれないんだが」

「もう俺の性分だって諦めてくれよ」

苦笑いしながら、昔からの親友に話しかける

あの火災から同じ家で暮らしていた服部 武蔵だ

………こいつのお陰であの時は俺が救われたんだな。となぜか懐かしく思い出した

あのとき、俺はあの大災害の中生き残ったことに罪悪感を感じていたが、そのとき出会った武蔵にそれを見抜かれて色々と助けてもらっていた

それについては恩情を感じてはいるが、いつも俺を疲れさせる様な言動はやめてもらえないだろうか？

凝り固まった身体を解し、食卓に向かうといい匂いがしてきた

桜の作ってくれた朝食だ

席につきながら、俺は桜に感謝の言葉を言った

「桜にはいつも作ってもらって悪いな。なんか恩返しとかできないものかな」

「いいんですよ先輩、食材とかは勝手に使っちゃってるんですから」

「……かぁー！やっぱり女性って言うのはこういう慎重しやかな奴がいいよな？そうだろ慎二？」

「そうだね。僕も兄として鼻が高いよ」

なにか武蔵は感動して桜の兄である慎二に話しかけていた

慎二は武蔵の次にできた友達だ

たしか中学の時あたりだったかな

あんまり目立たなくて教室の隅にいる様な奴だったけど、何時の間にか仲良くなっていた

まあ、友達なんてそんなもんだろとは武蔵の弁だ

実際慎二は良い奴だし、妹の桜のことも大切に思っているし、今はかつてあった暗い雰囲気というのは抜けきっている

俺としては不満なんてものは微塵も無いけれど、武蔵はよく慎二をいじり倒している

武蔵なりの親愛の証なんだが、慎二は結構嫌がっている

……そういえば、桜がここに来るようになったのも慎二が俺の家で朝食を食べに来たからだだったかな

慎二が家で朝食を何故食べているかというと『どうせ家も近いんだし、友達同士食べようよ』と言ったのだが、武蔵が『本音は?』と聞いたら『……正直、あの家では食べたくない。お爺様は不気味だし、家はお化け屋敷みたいだし』と話してくれた

「あゝ!くそ羨ましい?俺にもこんな献身的な妹がいたらよかったの?ああ、妬ましい?こうなったら慎二のワカメで味噌汁作ってやる?」

「や、止めろよ服部!僕のコレは髪の毛だって?そんなに僕のコン

プレックスを弄らないでよ〜!」

「兄さん？服部先輩やめてください？」

「うっせえ！こいつはどれだけ勝ち組なのかその身に刻む必要がある？とめんじゃねエエエエエエエ？」

「お前は自重しろオオオオオオオオオ？朝食が冷めるだろうが？慎二にもやりすぎだコラアアアアアア？」

武蔵が吠え、俺が全力で止める
こ、こいつマジで鍋に火をかけてやがった

このままだったら慎二は本当にお袋の味の代表料理にされかけない

「し〜ろ〜う〜？朝ご飯はできてる〜？」

「やべえ藤ねえだ？早く食わないと食料根こそぎ食われちゃう？士郎！慎二！桜！ここから先は戦争だ！自分の朝食のために他人への情けは無用だ？総員かかれエエエエエエ？」

「「了解？」」

「って、うな？もう皆食べ始めてる？……ふふふ、負けるか〜！」

藤ねえの来襲に武蔵が号令を出す
今までの経験で皆は武蔵の言う通りにした方が良いことを知っている
るのでそれに従う

それをみた藤ねえが、目の前の光景に一瞬怯みながらも、すぐに体制を立て直し食卓に突っ込んで来る

「あ！藤ねえ、それ俺の卵焼きだぞ！」

「ふっふっふん！油断する方が悪い……って、あー？武蔵それあたしのメザシ？」

「悲しいけどこれ戦争なのよねエエエエエエ？大体今藤ねえが言ったばっかだろ『油断する方が悪い』ってなアアアアアア？」

「桜、はい沢庵。なんとかとってこれたよ」

「ありがとうございます兄さん。おひたしは確保していますから」

いつものように騒がしくなる朝の食卓
騒々しいけど、こういうのもいいものだ
皆で囲んだ方が食事は楽しいし、何気ない日常ほど尊いものはない
親友と騒いで、友人と駄弁り、家族や皆で食事をする
……こういうのを幸せって言うんだろうな

「ってコラ？俺の海苔を取んじゃねえよ武蔵？」

「うっせ？今藤ねえに取られたからだ！恨むなら藤ねえを恨め！」

「って、藤村先生？僕の梅干し取らないで下さいよ……」

「藤村先生は人のオカズを取りすぎです?……あ!先輩までもですか?」

「悪いな桜。いい加減俺も腹が減ってるんだよ。もうなりふり構ってられないんだ?」

試しに俺も桜のきんぴらごぼうを強奪してみた

うん、美味い。なにか勝利の味がする

空腹もあいまってか、食欲がどんどん湧いてくる

ふと武蔵を見ると、ニヤリと笑いながら挑発的に手を動かす

……面白い、のってやろうじゃないか!

「士郎?俺の箸捌きについて来れるか?」

「上等だ!武蔵の方こそついて来やがれエエエエエ?」

再び俺たちは、食卓せんじょうに向かった

side? ? ? ?武蔵

あの騒がしい朝食を経て、学校の授業が終わり、いま放課後だ
いつものように士郎と慎二とで駄弁っている
そしたら士郎があゝの授業のことを聞いてきた

「武蔵、よくあんな問題解けたな。俺には問題文から分からなかったぞ」

「そりゃそうだろ……あんな問題を出す教師のほうがかどうかしてると思うぜ」

話を数時間前に戻す

数学の授業中、俺が少しうつらうつらしていたら、いきなり俺の名前が呼ばれた
……なんだよ、別にギリギリ寝てねえだろ

「服部、俺の授業で寝るとは良い度胸だな」

「寝てません。少し夢の世界に飛び立とうとはしましたけど」

「言い訳するな。罰としてこの問題をやらせてもらうぞ」

そういつて教師が黒板に問題を書いていく

……オイコラ、なんでアルファベットで書いてんだよ
ちよいちよい数字は混じってるけどさ

そんな嫌がらせをするからこいつは生徒に嫌われると思うんだけど
コネやらなんやらで教師になれたくせに、偉そうにしゃがってるか
らなコイツ

マジでこんな奴がいるとか驚いたわ

「あの先生、今は英語の授業じゃないですよ？」

「関係ない。それより武蔵、せっかく俺が英語で書いたんだ。お前
も答えは外国語で書け」

その言葉を聞いて、あちらこちらから批難の声がチラホラ聞こえて
くる

『なんて無茶ぶりしやがる』とか『つか問題文が英語とか何なん
だよ』とか『服部君可哀想……』とか

まず黒板を眺める

そしてまず、チョークよりもさきに黒板消しを手に取り何文字か消
していく

そしてそこに俺が新しく英語を書き始めたところで静止の声が聞こ
えた

何なんだよ……

「服部、なんで勝手に問題文を消した？それとも何か？難しすぎる
から問題を変えようとしているのか？」

「何言ってるんすか。問題が間違ってるから訂正してるんじゃないっすか」

「何を言ってるんだ？言い逃れをするな！」

「この部分、多分ですけど『x軸の右の方向を正とする』って書いてあると思うんですけど『右』の英語は『right』じゃなくて『right』っすよ。それとここ、直訳したら『1、3、……』と言う風に偶数をxに代入して』って書いてありますよ。『奇数』の英語は『odd number』ですけど……」

「んなっ？」

「さすがにスペルミスしてる問題を解くのは俺には無理ですから……これだったら最初っから日本語で書けばよかったのに」

「う、嫌い？いいから早く解け？」

「へーい」

……よし、少しだけだが嫌がらせてやった
クラスのあちこちから小さな笑い声が聞こえてくる
はっはっは、ザマア

まあいいや、問題とくか……
えーと……

「……………解きましたけど」

「はあ？と、解いただと？」

「はい、結構簡単だったんで。スペルミスを見つけるほうが難しかったっすよ？」

「グググ……」

おお、悔しがつてる

教室内に「オオオ……」と歓声の聲がかすかに響き渡る
この教師、俺が解けないとタカをくくってたな
さーて、席に戻るか……

「おい服部？」

「……なんすか？」

「お前、何を書いてるんだ？」

「何って……答え以外ないじゃないすか」

一回黒板に書いてある俺の答えを見て確認する
どっか間違えてんのかと思ったが、見てみる限り何も間違ってるどころはない気がするけど

「そうじゃない？これは何語だ？」

「ドイツ語っすけどなにか？」

あいつが『外国語で書くように』って言ったんだから間違ったことはしていない

本当はロシア語で書いてやろうかと思ったけど情けをかけてドイツ語で書いてやったんだから感謝して欲しいくらいなんだが……

「もしかして、先生ドイツ語読めないんすか？そんなわけないっすよね？生徒に無理して外国語の問題を解かせておきながら、自分が解けと言われたら出来ないような、そんな人じゃありませんよね？」

「……………うぐ……………」

「で、これで正解ですか？早く教えてくださいよ」

「い、今から自習にする？じゃあな？」

そういつてその教師は慌てて教室からでていった
ふ……勝った

「よくやったぞ服部？」

「見たかよあの先生の焦った顔？」

「カッコいいよ、服部君？」

「やー、やーありがとう、ありがとう？」

皆が拍手をしてくれる

俺がまるでヒーローになった気分だ
俺は両手を振ってその声援に応える
うわー、すっげー気分がいいわー

そんなことあったな……

幸いなことにそいつの授業二時間連続だったから、二時間目が自習になったのはありがたかった

「相変わらず、武蔵の頭はどうなってるんだ？ いっつもジャ○プばつか読んでる気がすんだけど」

「たいした努力はしてねーよ。世界各国のジャ○プを取り寄せて全部読んでるだけだ」

なぜそこで呆れた顔をするんだ士郎？

慎二の奴もポカーンと口を開けて見てやがるし

……っと頼まれごととしてたんだったな。たしか買い出しに行かない
といけないんだったか

なんかよく俺は人に頼まれる事が多いんだが、理由がよく分からない
周りの皆曰く『なんだか頼りがいがある』らしい

体よくパシリにされてんじゃねえかとは考えたことがあったが、な
んとなく『勘』でそれはないって気がする

まあ、余った金は使っていいってんだから良いバイトだよな

「つーわけで、俺は買い出しに行ってくる。士郎は先に帰ってな」

「俺も行くぞ。武蔵だけだったら持てないだろう？」

「僕も手伝いたいんだけど……弓道部があるからできないや、ゴメ
ンね」

「気にすんなって、まあがんばれや副部長さんよ」

「うん、がんばるよ」

「……………いる？」
■ ■ ■

「はい。なんでしょうか慎二」

「アレの設置は僕の言うとおりにしてる？」

「はい、手筈は命じられたようにしましたが……」

「ならいいんだけどさ……、夜中に学校にいる人は全員病院送りにしてよ。でも他の人には見つからないように」

「……あの二人は？」

「構わない。いや、むしろその二人だからこそ怪我させてね」

「分かりました」

「……『英霊』である君にこんな事を頼んでゴメンね。でもこうするしかなかったんだ」

「気にしないで下さい慎二。それも考えがあつてのことでしょう？
共に頑張りましょう」

「うん。ありがとうね」

慎二は副部長だから色々忙しいんだろう。

……いやー、俺あいつの事結構気に入ってるんだがついつい弄りたくなるんだよな

……なんでかね？

「ほら武蔵、ボーっとしてたら危ないぞ」

「ん？ いや大丈夫だろ。だって……」

何時の間にか公道に出てたらしく、士郎に注意されていた

そして我に帰ったとき、目の前に自転車が迫っていた

……まあこのくらいなら『見える』けどな

すかさず俺は跳躍してガードレールに飛び乗る

……あ、避けられてビックリしてら

「俺は『眼』がいいんだからさ」

「……はあ。お前のその反射神経には敵わないな」

なぜか俺は生まれつき『眼』がよくて、大抵のものはかわせる

これのお陰で耐久力が低い俺は怪我をせずにすんできた
いやー役に立つなあ

「お、自販機だ。ちょうど喉乾いてたし何か買うか。士郎は何がい
い？」

「んー……俺は紅茶で」

「じゃあ俺はコーラにすっかな………お、当たりだ」

結構当たるんだよな、俺ってこういうの
懸賞とかは俺が応募した奴は大概当たるしな
しかしどうするかね、紅茶は買っちゃったし
とりあえずサイダーでも買っとこうかな……

「つつてもあんまりいらねえんだよな………士郎飲むか？」

「俺も紅茶だけでいいんだけどな……武蔵って運が良くてもあんま
り実用できたことないよな」

確かにな……

懸賞当たった奴とか、先に藤ねえがもってきてたりしてるし
宝くじはソコソコ当たるけど、これと言って物欲もないしなあ……
大概食費に消えて行くのが関の山だ
……自分でも欲が無さすぎると思う

俺としては、大人数で美味しい飯が沢山食えて、馬鹿みたいに大の字

で横になってグッスリ眠って、士郎や慎二達と無駄話が出来たらそれだけで満足だ

だから、俺はいつでも自分は幸せだと思ってる
ある意味じゃ、あの『火災』にあったのも『運命』ってやつだったのかな……

そう思い、つつい士郎に呟く

「運が良いとかなんか人それぞれだろ？俺は今までは不幸なんて思ったことは一回もないけどな」

「俺もだな……普通に幸せだ」

「そりゃあいい。……俺彼女とか出来たことないけど……」

「女友達は多いだろ？他の男子が羨ましがってたぞ」

「……ことごとく皆、友達どまりじゃ悲しくなってくるわ」

何でかね……？

いや、一般からするとかなり恵まれてるのは分かるよ？

世の中には男子にさえ相手にされない奴がいるわけだし、あの数学の教師がいい例だ

同じ学年の奴は男女問わず仲いいのが多いけど、異性から恋愛感情として見られたことが全くない

そんなに言うほど彼女が欲しい訳じゃないさ
でも健全な学生なら興味くらいはあるだろ？

それに、なんかこのままだったら歳くって、あーそろそろ結婚したほうがいいよなーとか言ってる時にも俺だけ相手がいないような気がするし……

「……………本当に士郎のフラグ体質が羨ましい」

「なんでさ？別に俺はフラグなんて立てた覚えはないんだけど……」

「……………いつも士郎はタイミングよく女子のピンチに巡り会うくせに……」

「何言ってるんだ、困ってる奴がいたら助けるのが当たり前だろ？」

「……………世の悲しい野郎達は、その機会が自分にもやってくるのでは？と思って夢見てるんですよ。それで、九割九分のやつがそんな機会がこないまま終わるんだよ」

「良いことじゃないか。それだけ女子が安全にいられるってことだろう？」

「……………純真すぎるよお前……」

あれか？下心のないやつが勝つように世界は出来てるのか？

……………それじゃ俺は士郎に勝てないわな……

軽く落ち込みながら歩いていくと士郎が何か気づいたみたいだ……

「なあ武蔵、あそこで釣りしてるのって……」

「あ、久しぶりだな。最近見掛けなかったしな」

士郎が俺を突ついて桟橋の方に指を向ける
そこには見知った顔がいた

なにやら高そうな釣竿を海に垂らしながら、ジャ○プを読んでいる
金髪

あれはあいつしかないな
ここ一週間見なかったし話しかけるか

「おう。久しぶりだな、釣れてつか？」

「む？武蔵に士郎ではないか、一週間ぶりか」

「そうだな、……ってうわあ、やっぱりか」

俺たち二人は側にあったバケツの中を覗き込む
そこには二桁は軽くいそうな魚が泳いでいる
士郎が呆れながら見ていると胸を張って喋り出す

「その程度、この手にかかれば造作なきことよ。なんなら何匹か恵んでやろうか？」

「マジか？やったぜ士郎？晩飯が増えた！」

「本当にいいのか？お前が釣ったんだろ？」

「構わぬ。釣りをするのを楽しんでいるだけで、そのような雑魚にはさほど興味はない」

「ありがとな。あ、そうだ。サイダー飲むか？さっき当てたんだけどよ……」

「ほう、気が利くな。丁度喉を潤そうと思っていたところだ。褒めて遣わす」

「はいはい、貴方様の期待に添えて喜ばしい限りですよ」

いつもこいつは上から目線なんだが、俺はさほど気にしていないそれもこいつの持ち味みたいなもんだし、結構面白い

だから俺はこいつの喋りによく乗ったりする
俺の台詞を聞いて機嫌を良くしたのか、軽い笑みを浮かべながら士郎の方に話しかける

「ところで士郎。あの妄言には近づけたのか？」

「妄言なんかじゃないさ。……まあボチボチかな。今でも何をしたらしいのかよく分からないし」

「ふん、この世の全てを救う『正義の味方』になりたいなど妄言と言わずしてなんと言うか！」

『正義の味方』

それは士郎があの日以来抱き続けた理想
切継が望んだ空想上の夢

現実になろうなんて子供くらいしか思わないだろう。
けれど士郎は何としてでもなろうとしている

全てを救う『正義の味方』に

「しかし、だからこそ興味深い」

そこまで言って、こいつは口の端を歪めながら士郎を見やる
まるで、人間が馬鹿なことをして遥か天上にいる神がそれを嘲笑う
かのように
そして続ける

「人間の身に余る理想を叶えようとするお前の姿は見ていて飽きないぞ。」

足掻いて見せろ、それでこそ人間というのは面白いものだ」

「見せ物じゃ無いんだけどな……まあ形は何であれ応援してくれて
ありがとな」

士郎が苦笑いしながら感謝の言葉を出すと、こいつは少し目線を逸
らした
そういえばこいつ真っ直ぐ感謝されるのに慣れてなかったんだっけ
か？

しかし、こいつも変な奴だよな。『正義の味方』を馬鹿にはしている
が、言い方があれだが応援してる

普通は取り合おうとさえ思わないもんだがな

「お、そろそろ行かないと……あ、そうだ。今度何かつまめるものでも作ってこようか？ 魚の礼って言ったらあれだけど」

「我^{オレ}に献上するとは殊勝なことだ。よい、我に献上することを許す。精々私の舌を満足させてみよ」

「なーに偉そうに言ってるんだよ。それじゃ俺たちは行くぞ」

「ああ、待て武蔵」

買い出しに戻ろうとしたら、呼び止められた
何だろうか、用事か？

「これを持ってゆけ」

「……なんじゃこりゃ？」

そう言って渡されたのは、何か赤い破片を2つ
……これをどうしろと？
なんの役に立つんだこれ、なんかの部品か？

「それを士郎と二人で分けて持っておくが良い。いずれ使う時がある」

「……まじか？」

「まじだ」

本気かよ……おかしいだろ

まあコイツが言うならそうなんだろう

ありがたく賜っておきますか

「そうか、ありがとよギル」

「良い良い、我はお前らをそれなりに気に入っておるからな。礼な
ど不要だ」

「日本人だからな、何か貰ったら感謝する癖がついてんだよ。それ
じゃあな」

そういつて、俺達は奇妙なダチーギルと別れた

第二話、始まりの日、夜編

「うええ、もうこんな時間かよ……………士郎、直りそうか？」

「待てって、今『解析』してるところなんだから」

学校に帰ってから、士郎がストーブの修理を頼まれていた

……イヤイヤ、普通の学生にストーブ修理技術なんて持ってねーだろ
なんで頼むのかね？

なんかもう日が沈んで、月が見え始めてきたし
ここまで手間かけさせやがって

士郎が『魔術師』じゃなかったら無理な話だぞ

「…………よし、この部品が壊れてるのか。あとこの回線も切れてるし
…………」

「本当に便利だよな。お前の『解析』と『強化』って」

「これを使えるのも武蔵のおかげだよ。お前も『魔術師』じゃなかったら一々『魔術回路』作り直してたし」

実は俺達は『魔術師』だ

とは言ってもそんなに色々できるわけじゃない

俺なんかは『風』を起こしたりする程度だし、士郎は

物体の構造を魔力で補助する『強化』

物体の構造を魔力で把握する『解析』

あともう一つ、ある魔術が使える

……まあ、それは効率が悪いらしいが、たまに使ってたりしている
士郎はこっちが得意らしいしな

しかもこいつ、『魔術回路』を一回作ったら、また新しく作るなんていうこともしてた

普通は一回作ったら二回目からはそこに魔力を流し込むだけで済むんだけど……

見つけるの遅かったら死んでたかもしれない
それくらい危険な事をやってんだよこいつは

「士郎、あれちゃんと着けてるか？」

「ああ、着けてるぞ。……橙子さんって凄いな。俺も今度会ってみようかな」

「や、やめとけ？滅多なことを言うんじゃないよ？お前にはまだ早すぎる？」

「……………一体どんな人だよ」

士郎が今身につけているのは、橙子さんからもらった『魔力封じ』の指輪だ

実際に魔力を封じるのでは無くて、これをつけていると『魔術回路』を持っていることがばれなくなるというもの

普通の生活を送りたいから、魔術師だと知られないほうが都合がいいだろう。と思ったからだ

……ただ、貰ったはいいけど、死ぬかと思った

元々は、士郎が魔術師であることを隠すための道具を探していただけたんだ

で、探していく内に橙子さんのところに辿り着いたというわけだが

……

……できれば、二度は行きたくない

この指輪を貰うだけでそうとうやばかった

下手すりゃ死んでた

なんとか貰って、帰ろうとしたときに『今度は、その士郎とかいう奴も連れてこい。お前のことがそれなりに気に入ったんでな、少なからずとはいえ鍛えてやる』とか言われた

俺にはそれが死刑宣告にしか聞こえなかった

なんせ、こんな小道具（俺からしたらとんでもないものだが、橙子さんがそう言っていたのでそう言う）

を貰うだけであの世が見えかけたんだ

鍛えるとなると、マジで何回か死ぬかもしれない

んなところに士郎を連れていけるかよ

……とは言っても、士郎は行きたがるんだろうな

封印指定されてる魔術師に教わる絶好の機会だからな……

はあ……俺、努力嫌いなんだよな……

「あ、ついでにその鉄パイプ『強化』しといてくれ。あと自分の

足にもかけておく事を薦める」

「は？なんでさ？」

「いや、何でって……」

瞬間、何かの音が耳に入った

その何かがとんでもない速さで飛んで来た

それは、間違いなく士郎の顔面を狙っている

俺は、手に持っている鞆で、それを防いだ

「なんか狙われてるっぽいし。ってあアアアアアアア？鞆に穴空いてやがるウウウウウウウ？」

「何？一体なんでだ？」

修理をやめて士郎が飛び上がる

即座に自分の足に『強化』をかけるあたりは流石だ

よく見ると、俺の鞆に杭が刺さってる

これを投擲したのか……

しかし……俺の鞆に穴あけるたぁいい度胸じゃねえの

仕返ししてやりたいのだが、この杭の速さからしてまともに戦闘しても返り討ちだ

そこで近くの教室の下にある小窓を蹴破ると鞆から杭を引き抜き、柱に固結びする

「何やってんだ？早く逃げるぞ！」

「時間稼ぎだ？ついでにこれも？」

巻き取られる鎖がピンとしなり、柱がギシギシと音を立てる。

俺は、鞆から『あるもの』を取り出すと杭と鎖にたっぷりとそれを掛ける。

「よし！」

「よし！じゃねえ？お前は何でんなもん掛けてんだよ？」

「このままやられっぱなしでいられるか？まともに戦ったら勝てないから、これぐらいで許してやる！」

「いやだからって『瞬間接着剤』なんてつけても意味ねえだろ？」

俺が掛けたのは『瞬間接着剤』だ

これで少しは嫌がつてくれはしないだろうか

柱が限界を迎え、杭と鎖が激しく跳ね回りながらドアの向こうに消える

そして、数秒後……

「キャーッッッ？」

女性の悲鳴が辺りに響いた

音源は間違いなく杭と鎖が戻って行った方向

……まさかこうも上手くいくとは

「ふ……見ろ。敵は女だ」

ドヤ顔をする俺に対して、頭を抱える士郎

情報はいつの時代でも重要だからな。集めて置いて損はない
そう思っていたら、また悲鳴が聞こえてきた

「ああ？封印に接着剤が？」

「しかも、何かを封印する能力もあるっぽい」

つーことは魔術師関係か？

士郎は頭痛でもするのか頭を抱えてるし

……なんもしなくても情報が手に入るなあ

そして、今度は、ドアの辺りがビシビシと石化していく

「石化能力もあるみたいだぞ」

今度は士郎は目眩を引き起こす

……いやー、凄いな『瞬間接着剤』

まさか相手の能力まで分かるなんてなあ

「……………なあ武蔵、その接着剤なんなんだ…………？ ただの接着剤にはそこまで効果はないだろ？」

「ん？ ああ、これな、俺の魔力を流し込んであんだよ」

「やっぱりか、どんな効果だ？」

そりゃ、ただの接着剤であそこまでの惨事にはならんだろ

さすがに気づいたか

つつても、普通に見てたら市販の接着剤にしか見えねえけどな

「こいつの効果は、『誰かがこいつを塗った武器に触れたら、そいつの武装を強制的に解除する』ってやつだ。俺はこれを『廃刀令』って呼んでる」

俺が説明すると、士郎が感心したように頷く

とは言っても、俺が作れる魔術的な道具なんてこれくらいしかないけどな

「……………うわあ、便利だなそれ」

「いや、不便だろ」

「なんでさ？」

「相手の武器にどうやってこれを塗るんだよ」

「……あ」

今の攻撃だけ例外だ

戦ってる最中に相手の武器に触ることなんて不可能に近い
だからといって、自分の武器につけておいて相手の武器につけよう
としても、まず自分の武器が吹っ飛ぶ

だから通常は使えない代物だ

……でも、いくら武装が剥がされたからって、声を出すやつがいる
かね？

そう考えると、相手の性格が浮き彫りになってきた

士郎をみると、頷き返してくる

……やはり、お前もそう思うか

「しかし、これだけは言える。敵は……………」

ドジっ子だ」

「間違いなくな」

言い合って、俺達は二手に別れた

学校の外、そこには二つの赤い影があった

一人はこの学校では知らぬ者はいない『ミス・パーフェクト』こと『遠坂 凜』

もうひとりとは、紅い外套を身に纏った屈強な男だ

この二人は今回の『聖杯戦争』に参加しているマスターとサーヴァントだ

見回りのためと、このところ学校に『結界』を張ろうとしている人間を探しだすため夜中の学校を訪れた

……訪れたのだが、その二人はたった今校舎内から聞こえて来たサーヴァントのものであるう悲鳴を聞いて全力で脱力していた特に『接着剤が?』あたりで

「……何ですよ? 何で接着剤で相手の『サーヴァント』の能力が分かるのよ?」

凜は思いつきり項垂れている。

その姿からは優等生としての気品が全く感じられない

傍らの男も憔悴し切っている。

「誰が使ったのかは分からないが、サーヴァントの戦闘に接着剤を用いるなど……」

妙な戦略に頭痛が増す男

そりゃそうだ。今までの有名な決闘や戦争では接着剤なんてものを使用する人間なんていない

というより、そんなことを考える人間がいない

「情報が手に入って喜ぶ所なのに、素直に喜べない……」

「安心しろ。私もだ」

このとき、

何やら納得が行かない事が多すぎて、気落ちするが気を取り直して行こう

そう凜が思い、再び上を見上げると何か黒い影が迫ってくる

「ちょ、ちょっと退いてくれエエエエエエ？」

「んな？」

その影は真っ直ぐ凜の隣にいたアーチャーに落ちてきた

しかしさすがはサーヴァント、ギリギリでその影からの奇襲を相手に視認される前に霊体化してかわす

それでもビックリしたのか、アーチャーの額には少しだけ冷や汗が浮かんでいた

影は着地し、立ち上がって未だに呆然としている凜達に向かう

「あ、あれ？遠坂じゃないか？どうしてこんな夜中に学校に来てるんだ？」

「え、衛宮君？」

思いがけない人物が落ちて来た

凜からすると、まさか魔術師でもない人物が落ちてくるとは思えなかったから

凜の中では『衛宮士郎』は『魔術回路』を持っている人物ではないと定義されている

昔の頃から『魔術回路』を作り直していた士郎なら普通にしてみればなかっただろうが、今は『魔力封じ』をつけている
これならば、高位の魔術師でも気付かないだろう

「あ、遠坂、早くここから逃げたほうが良い。なにか不審人物が学校にいる。まるで人間じゃないように強いぞ」

「衛宮君はそいつから逃げてきたの？」

「おう、マジで死ぬかと思った」

……サーヴァントから逃げといて、死ぬかと思ったでよく済ませられたわね……

凜はその考えにようやく至った

今、士郎が校舎から落ちてきたということは、あのサーヴァントと交戦していたのはこの少年だということだ

通常、サーヴァントに狙われて、生きながらえる人間がいるはずがないのだから

しかも、魔力を感じられない、ただの人間である士郎には尚のこと不可能だ

とにかく、この少年は先ほどのサーヴァントの情報を少しは知っているかもしれない

どうにかして情報を引き出すべきだ

そう考えた凜は士郎に尋ねる

「今の悲鳴は衛宮君がやったの？」

「……どういう意味だ？ 遠坂」

「あなたがさっきの悲鳴の持ち主と戦ったのかって意味よ」

「……………は？」

今の台詞を聞いて、士郎は驚いた顔をした
凜が一体どうしたのかと聞こうと士郎に近づくと、その分彼も間合
いをあける

その顔に徐々に警戒の色を浮かべながら……………

「…………衛宮君？どうして逃げるのかしら？」

「…………その質問に答える前に、俺も聞きたいことがある」

ついには、士郎がどこから攻撃されても対応できるような体勢をとり始める

凜は戸惑った。

アーチャーは霊体化して見られていない

自分の魔力の隠蔽も完璧だ

敵意を抱かせるような口調にもならなかったはず

……………一体どうして

「……………いいわよ。なにかしら？」

大丈夫、バレるはずがない

そう言い聞かせる凜だったが、次の士郎の発言を聞いて思い知らされる

自分の血に伝わる、もはや呪いの域に達した特性を

「……普通、女の悲鳴を聞いたら、そいつが不審人物に襲われたと思うだろ？ どうしてそいつが不審人物だと分かったんだ？」

「!!!!!!」

うっかりしていた

確かに女性の悲鳴は『何も知らなければ』被害にあったものだと考えるのが自然だ

それなのに、迷うことも無く『女性と交戦した』なんて聞くはずがない

故に士郎は不審に思ったのだ

「……遠坂、お前何か知ってるのか？」

「うっ……」

言葉につまる凜

答えられないのだから仕方が無いことだ

答えてしまうと、自らが魔術師であることをバラしてしまうことになるのだから

しかし、次の瞬間士郎の姿が消えた

その数刻後に風が凜ぐ

ふと見ると、そこには霊体化を解いたアーチャーが士郎に斬りかかっている姿があった

それを瞬時に避けて、凜の視界から外れたのだろう

いや、それよりも気になければいけないことがあった
何も命令していないのに、アーチャーが士郎に攻撃をしていることだ
即座に凜はアーチャーに静止の声をかける

「うおっ？っつあ？いきなりなにするんだ？」

「アーチャー？やめなさい？」

「……おやおや、魔術というのは秘匿されるべきでは無かったのか
ね？それにどちらにしても生かしておいて良いものでもあるまい」

一旦手を止めて、アーチャーは凜に尋ねる

それでも両手に持っている陰陽剣は士郎に向けたままだ
アーチャーの言うことに納得のいかないのか凜が反論する

「なんでよ？サーヴァントについて何か分かるかもしれないじゃない？
い？」

「この小僧が一般人である場合、口封じをしなければならない。情
報を引き出すにしても、素人目から見た状況が参考になるとは思え
ない

また、魔術師である場合、尚のこと生かしてはおけんだろう。それ
こそ『聖杯戦争』に関わっている可能性が高い。

……情報一つより、マスターの命を奪える方が破格だと思わんかね
？」

士郎に聞き覚えのない言葉が聞こえてくる

『聖杯戦争』？ 『マスター』？ 『サーヴァント』？

何のことだよ、訳が分からない

だが、今はコイツから逃げることを優先して考えなければいけない
……しかし、どうやって？

さっきは武蔵がいたから何とかあったが、今は居ない
隙をみて逃げようと思っても、コイツの注意は完全にこちらを向
いている

武器になりそうな物も持っていない
八方ふさがりか……

………仕方がない

『あれ』を使うか……

「……………『投影開始』」

相手に聞こえないくらいの声で呪文を呟く

とは言っても、あくまで暗示みたいなものだからさほど意味はない
それでも、俺にとっては必要なもの

俺が使える魔術は三つある

一つ目は、物体の構造を魔力で補助する『強化』
二つ目は、物体の構造を魔力で把握する『解析』

そして、

「……………『投影完了』」

「なに……………?」

「…………え、嘘…………?」

三つ目は、物体の構造を魔力で模倣する『投影』だ

コイツが持っている双剣を『解析』し、出来損ないだが『投影』した……やっぱり穴だらけだな……構造がしっかりしていない

でもこの際文句は言ってられない

俺は剣を構えて対峙する

「…………衛宮君、あなたが『魔術師』だったなんてね」

「俺からしたら、遠坂が『魔術師』だったことに驚いたぞ」

「…………あらあら、私は一応冬木のセカンドオーナーなんですけど?」

「そいつは悪かったな。今度菓子折りでも持ってくよ……………生き
てたらな」

事情は分からないが、逃げるためには手段は選んでられない
しかし、遠坂が『魔術師』とは気付かなかったぞ

軽口を叩いて時間を数える
……そろそろか

「……なぜ、貴様がそれを使える？」

「なんだよ？文句あんのかよ？」

「……微妙に歴史がずれているのか……」

なにかぼやき始めたコイツを尻目に、その方向に持っていた剣を投げる

自ら武器を捨てるなんて、バカのやることに見えるだろう
だが、考えあつてのものだ

ソイツは容易く、その剣を避けるとバカにしたような笑みを浮かべてくる

……なんかスッゲーイラつくんだけど

「ふん、やはり貴様はバカのようなだな。そんな攻撃が当たると思っているのか？」

「……………バカはあんただ」

「何……？」

ソイツの背後で、『アイツ』がその剣を受け取るのを確認する

……タイミングバツチリだなおい
訝しげな顔をしたままアーチャーがこちらを見ている今がチャンスだ
行け？

「だらっしやアアアアア？」

「ぬ、ぬお？」

打ち合わせ通り、校舎から出てくる武蔵に向かって剣を渡す
そしてそのまま、武蔵はコイツに剣を振るう
さすがのコイツも慌ててその斬撃を受け止める
その瞬間に、武蔵は剣を手放し、俺は足に『強化』の魔術をかけ、
その場から全力で逃げる

早くしないと、あの女も襲ってくるかもしれない
限界を超えて自宅まで疾走する

「クソッ！待て？」

「待てと言われて待つ奴があるかアアアア？……ああ畜生？土郎、
魔術使うぞ？」

「おう！でも出来れば早めで頼む？」

やっぱりあの赤い奴は追ってくるか……
今の俺たちは、世界記録を余裕で塗り替えるくらい速いんだけどなあ

アイツは一体何なんだ？

「行くぞ、『追い風』？」

「助かる武蔵？ところで、あのお前が相手してた奴はどうした？」

武蔵の魔術の効果で、後ろから風で押されて速度が上がる
そして走りながら先ほどから気になっていたことを尋ねる
あの最初に襲ってきた女性はどうなったのか
まくことができたのだろうか
それとも……

言っていたら、上空からさっきと同じ杭が飛んでくる
……なるほど、これが答えか

「いや、武器なしとかマジで無理だから。アイツは絶対人間じゃない」

「……だろうな。遠坂の連れてる奴も似たタイプの奴らしいし」

「……マジかよ」

まさか冬木が人外が闊歩する町とは思ってもよらなかった
どうしてこうなった、俺達は普通に暮らしていただけなのに

「仕方ない、一旦家に戻って俺の刀を取ってこよう。その剣よりはマシだろ」

「……まあそうだろうな」

俺の再び『投影』した双剣を見て武蔵が言う

そういえば武蔵は刀を二本持ってたな

あれは確か、俺達が初めて会ったときから腰につけてたような……

「とか言ってる間に家だ。二手に別れるぞ……とは言っても互いに狙われてる相手が違うんだよな」

俺は何故かは知らないが、あの赤い奴に追われている

武蔵はさっきの『廃刀令』のせいでもう一人に狙われている

……作意を感じるな

「それじゃあ士郎？生きてたらまた会おう？」

「縁起でもないこと言うなよ！」

そうだ……俺はこんなところで死んではいけない！

俺には叶えなければいけない『理想』があるんだ！

そのためにもくたばってる場合じゃない？

必死で俺は庭へと逃げていった

「……おいおい、ここまで追ってきますか？俺生まれて初めてだわ、こんな美人に追いかけられるなんて」

「それは光栄ですね、このようなデカイだけの女にお世辞とはいえ嬉しいものです」

「……………今のあんたの台詞、世界の女性の大半を敵にまわしたぞ？あんたが美人じゃなかったらこの世には醜女しか生存してねえわ」

家の中まで入ってきますか……

俺を追い詰めるためか、目の前に立ちふさがる女を見ながら考える普通に不法侵入じゃねえか、ってかそれ以前に殺人未遂か

俺の唯一と言っている、誰にでも勝てる自信のある軽口も本気で言ってるのかかわされる

少なくとも俺はこいつ以上の美人を見たことはない

「…………さて、それはさておき、貴方には死んでもらいます」

「いやー、あんたほどの美人に殺されるならある意味本望かもなあ。
……でも何の説明もなく殺されるのは納得できねえよ」

「貴方が知る必要はありません」

そういい、ジャラリと音がした
またもあの鎖かよ……

瞬間に、杭が俺目がけて飛来する
だが……………

「はっ！この程度なら避けれるわい？ほらっ！ほいっ！せいっ！」

それでも俺には当たりはしない
俺の『眼』は動体視力が半端ないからな、このくらいならまだ見切
れる

これについてはこいつも予想外なのか連続して放ってくる
隙を見て後退し、目当てのものがあある部屋まで近づいていく
そうだ……もう少しだ……

「くっ！……いいかげん当たりなさい？」

「当たってたまるか？死ぬわ？」

イライラさせながらも、ようやく辿り着いた
よーし、このまま……

「もらったアアアアア？」

「しまった？」

なんとか刀を手に入れられた
しかし、これで戦えるかどうか……

「な？……それは……」

「ああ？これがどうかしたのかよ？」

俺が刀を構えると先程よりも驚いた反応を見せる女
……ただの刀だろ？
なんで、そんな『弱点』とか『天敵』に出会ったような顔をしてんだ

「……………これは迂闊でした。貴方がそれを持っているなら、なお
のこと貴方を倒さなければいけませんね」

「だーかーらー……………」

今のですっげえ苛立った

いきなり命を狙われて、なんの説明もない状態が続いて自分で思ってたよりもフラストレーションが溜まっていたらしい
だから、つい壁を叩いて叫んだ

「その理由を説明しろって言ってんだろがアアアアア！……！！」

その時、俺の横の床が光りだした

怒りで周りが見えていない俺は、後ろで何か起こっているのに気付かない

そして、瞬く間に女は二本の赤い槍によって拘束されていた
その槍の持ち主を見ると、二人の男が何時の間にかそこに居た……
……え？あ、あれ？はい？

「え、何が……アレ？ちょっと待って、ちょっと待ってアレ？コレ夢だよね、絶対夢だよねアレ？夢じゃなきゃおかしいよね

アレ？つーかだとすれば俺の深層心理どうなってるんだアレ？アレ？アレ？つーか“アレ？”ってなんだっけアレ？」

「……………召喚されて、いきなりマスターがゲシュタルト崩壊してんだけど……………」

あまりに突然に二人の男が現れたから、怒りがすっかり消え去ってしまい、混乱するばかりの俺

それを、呆れた目で眺めてくる一人の男

その青年は突きつけている赤い槍を持って全身青のボディースーツのような服を着ているという妙な格好

しかし、呆れているにも関わらず、女からは全く警戒を解いていないのが分かるあたり相当な手練れなのだろう

……………え？いやマジでなんなの？

「まー、召喚された時は『サーヴァント・ランサー、召喚に応じ参上した。お前が俺のマスターか？』とか聞くんだけだよ……………」

軽く言った後、即座に目つきを鋭くして女を睨む

よく見ると、もう一方の男と同じようなボディースーツに革鎧を身に付けていて、姉ちゃんに向けている赤い槍の他に、黄色の槍を持った男も射殺さんばかりに女を凝視している

その男には泣き黒子もついていて、普段ならばそれもありまって異性を惹きつけるような容貌なのだろうが、今は阿修羅の如く顔を歪ませているため、より一層恐怖心を相手に植え付ける顔をしていた

「この状況を見る限り、その質問をする必要もなさそうだな……！」

「貴様……我が主に手を出すとは………覚悟はできているんだろうな？」

「クッ………まさか、もう参加者になるとは………？」

なんか女が、悔いたような声を出して呻き始め、二本の槍を持っているやつが、赤い色の槍をさらに突きつける
………って？

「ちょ、ちょおストおおおッ！………俺には何がなんだかさっぱりだ？何で俺は殺されなきゃいけないの？何でお前らいきなり現れてるの？何でその姉ちゃんを殺そうとしてんだアアアアアア……？」

このままだったらこの場は血みどろになって、あら嫌だ奥さんお隣さんで殺人事件がおきたらしいわよ？あらそうなの、ひどい世の中になったものね、そんなお隣さん消えてしまったらいいのに。そうよね、オホホホホーみたいな噂が流れちまう？
今まで円滑に関係を結んできたって言うのにそれは困る？

「あ、あのお二人さん。そのお姉さんを放してやってくれませんか？家んなかでそんなスプラッタ映像を流すというのはヤバイから」

「……なあアンタ、どういう状況か分かってるのか？」

さつきよりさらに呆れた顔をする青年

「……いや、分かっているつもりだけど………どういう状況かとか、俺がおかしいってこととか……」

でも俺は、ちょっと魔術が使えるだけの平和主義な日本人だから常軌を逸した話にはついていけないといいますか……

「あ、あのよ姉ちゃん。二度と俺達を襲わないって約束してくんない？ そしたら逃がしてあげても良いけど……」

「な………！ し、正気ですか？」

「だまらっしゃい？ 殺しはよくありません？ つーかどうなってんのか分かんねえと処分も決められん？」

「……多分、士郎だったら同じ様なことを言うと思う
だから良いんだよ？」

つーかなんかもう面倒くさい？

「……本当に逃がしてくれるんですか？」

「そっちが約束守るんならな。今度やったら絶対許さねえけど」

「……………分かりました。もう貴方達を襲わないと約束します」

「よし、それじゃあ行ってよし？」

「おいマスター？こいつ絶対約束守らねえぞ？」

……五月蠅いな。助けてもらっておいて言うのもあれだけどいいじゃん？俺復讐とか報復とか嫌いなんだし？

俺なら殺されたとしても、そいつを祟ってやろうとかは思わないだろうし

……まあ、罰を与えたり、ダチが危ない目にあってる時はめちやくちや怒るかもしれないけど

少なくとも、俺個人の問題なら気にしないの？

「いいって、いいって。それよりも士郎の方が心配だ。そっちの援護に向かうぞ」

「……………っはあゝ……………わあったよ、ほらとっとと行け」

「我が主の寛大な心に感謝するんだな」

「……………ありがとうございます。それでは……………」

言い残して、女は何処かに消え去った

……………っはー！……緊張した？

いきなり殺人現場に出くわすところだった？

……あ、こいつらに礼いわねえと……

「……あー、助けてくれてありがとう。それと勝手に逃がしてすまんかった」

「ああ、もう良いって。俺もあんな勝ち方好きじゃねえし」

「俺は、主の命に従うのみです」

……真逆だな、こいつら

かたや、軽い感じのラフな兄ちゃん
かたや、堅い感じの愚直な兄ちゃん

………どういうこった？

「で、聞いておきたいことが……」

「何だよ？」

「俺達に答えられるなら何なりと」

「お前らだれ？」

「「……………え？」」

……………あれ？なんで固まってんの？

俺、そんなに変なこと聞いたっけ？

何で俺が知っていること前提で話が進んでるわけ？

「……いやあ、召喚されて最初の質問がそれってなあ……」

「も、もしや、俺では不服であると仰りたいのですか？」

「ち、違う違う？マジで俺には何が起こっているのか分かってないんだよ？さっきから訳もわからず襲われたり、殺されそうだったり、士郎が赤い奴に切りかかれたり……」

そこまで言っと思いだした

士郎はどうなった？

俺はどうにかなったみたいだが、あいつはどうか分かん？
助けに行かないと？

「ちょっと兄ちゃん達！俺の親友が襲われてるから助けてやってくれよ！てゆうかマジでホンマどうかお願いします？」

「な、何……？土下座までのプロセスが0，2秒だと？速すぎるぞ！」

「主？何故我々に頭を下げるのですか？」

何か言ってるが、なりふり構ってらんない
俺のささやかな幸せを壊したくないんだ？

士郎が強いことは分かってるけど、『アレ』は別格だ
勝てると思えない

だから、今はこいつらに頼むしかない
そうやって頭を下げてると、軽い感じの兄ちゃんが慌てて話しかけ

てきた

「つーかお前、俺のマスターなんだから普通に命令してくれりゃいいんだよ?」

「よし分かった、お前ら士郎を全力で助ける?」

「変わり身までも速い?」

「こっちだ? 急げ?」

「分かりました主?」

「チツ……ったく、しょうがねえなあ……」

そうと知ったら話は早い

命令すりゃいいだけなんだし

即座に立ち上がり二人を連れて表に出る

……………無事でいてくれよ、士郎

s i d e

士郎

「……はあっ！………はあっ！」

「………しぶとい奴だ。これほどまでもつとは思わなかったぞ」

俺は庭で、出来損ないの陰陽剣を振るって、赤い外套を身に纏った男と応戦している

……とはいっても、ジリ貧だ

じよじよに俺にはコイツの剣を捌き切れなくなってきた

このままだったら、あつという間に■されてしまうだろう

こっちが必死だったのに、相手は汗一つかきやしない

……くっ！また来やがった？

「……何故だ。何故貴様はここまで戦える」

「へっ！生憎とこっちは親友の馬鹿騒ぎにいつも巻き込まれてるんでな、それでいくらかは鍛えられてんじゃないのか？」

「……『魔術』の行使も滞っていない。それどころか、出来損ないとはいえ『投影』まで………」

昔、武蔵に『魔術回路』を開けてもらったからな

そんなときは1本だったが、今では13本まで開けられる

一応、あと14本あるみたいだが現段階では使用できない

それでも、『強化』も『解析』も使えるから十分だけど

「……それに、『親友』だと？そんなもの………」

「余所見してんじゃねエエエ？」

なにかブツブツ言ってるが、好機と思い一気に攻める
普段武蔵の練習相手になってるから、ある程度は太刀筋が読めるの
がこんな所で役に立つとは……
だが、相手は更に上らしく反撃をしてきた

「貴様如きが私に勝てると思うな？」

「んなもん、やってみねえと分かんねえだろうが？」

「ならば、今見せてやる？」

「う？グハツ？」

打ち合っていると、突然相手が蹴りを繰り出してくる
それをまともに食らった俺は、土蔵まで吹き飛ばされた
つつー？今ので肋骨が2、3本やられたみたいだ……
しかも剣まで折られちゃったし……
すごく痛い……でも痛みに気を配ってる余裕は無い？

何とか立ち上がった俺は折れてしまった剣を再び『投影』し始める
が……

次の瞬間、床が発光し、魔法陣を浮かび上がらせていた
な、なんだ？俺が『魔術』を使ったからか？今までは何も起こらな

かったのに？

魔力が満ちた魔法陣は、朝の光のように土蔵を照らす
俺はとっさに凄まじい光を両手で遮った。

光の収束と共に、そこには一人の甲冑を着けた少女が、神話の絵か
ら抜け出したように威風堂々と立っていた
金毛の髪を束ね綺麗な顔立ちをした少女は、ゆっくりと瞳を開くと
目の前にいる俺を見据える
そして、落ち着いた口調で口を開いた

「問おう、貴方が私のマスターか？」

「……………え？」

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上しました。これより我
が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。マスター、ご
指示を」

「言ってる場合ではないぞ、セイバー。もう敵がそこまで来てるん
だからさ」

途中、セイバーの言葉を遮る様に一人の男性が声を出した
それに気づいた俺と少女ーセイバーはそちらの方に顔を向ける

赤い外套を着けた青年が、座り込んでいた
暗闇のせいで顔がよく見えないが、白い髪をそのままにしているこ
とが分かる

男が立ち上がり、俺の方まで近づいてくるとその顔がよく見えた
そして、俺は驚愕する

その青年は、先ほどから俺を襲っている男と瓜二つだったからだ

「つと、早い所外にいる奴なんとかしないとな。マスターは俺の後ろに隠れといってくれ」

「え？ ちょ、ちょっと？」

制止の声も聞かず、青年は外へと飛び出して行った

side

アーチャー

「何故だ……………」

私は、思わず言葉を漏らした

目の前には自分の復讐するべき相手やつあたりー衛宮士郎と、かつて巡り合った高潔な騎士王ーセイバーが土倉の前に立っている

本来ならこの場には、あの青き槍兵がいるべきだが好都合だ

このほうが、面倒ごとがなくていい
とっとと復讐を済ませてしまえばいいのだ

でも、それができない

射程距離には問題はない、元々こちらは弓兵だ。そんなものあつて
ないようなものだ

ならばセイバーの存在？

それも違う。全力でやればセイバーは倒せずとも未熟者であるマス
ターは簡単に殺せる
ならばなぜしないのか

……………なぜなら

「何故私がそこにいる？」

私とまるで姿が同じ人物がいたのだから

しかも私の持っている『干将 莫耶』と全く同じものを取り出して
その男は軽く笑って私に言う

「悪いけどな、俺はお前じゃない」

「黙れ？貴様が英霊になるには『守護者』以外ではあり得ない話し
だ？」

あの地獄を味わって、なぜその小僧を殺さない？」

「……はあ、まるでガキの癪癪だな。こんな風に見えてたのか。

……………言つとくけどな」

男は溜息をつき、呆れたようにこちらを見る
それさえも私には信じられなかった

どうして貴様はそも『人間』であるかのような行動をとるんだ

『私』であるなら、そのような振る舞いはできるはずがないのに

私の戸惑いを知ってか、男は『私』との決定的な差異を突きつける

「俺は、お前の様に今までのことを後悔してない。お前が自分の今までを後悔してる限り、お前は絶対に俺には勝てない」

「抜かせ？」

「そうくるか……ならば」

俺は激昂し、男に斬りかかる

それは自分の後悔を否定されたからか

勝手に自分の人生を酷いものだと思つて決めたからか

それとも……

自分が持てなかったものを持っている『自分』に対しての妬みなのか

男は剣を受け流すと、私に剣を向けて完全な離別を示す

「このサーヴァント『マスター』が相手してやる？ にかかってきやがれ？」

第三話、話を聞かないことには何も決められない

side

武蔵

くそっ？士郎は無事なのか？

先ほどの襲撃者によって殺されそうになっていた親友のことを案じながら庭へと転げ出る

さっきは俺だけだから、どうしようもなかったかもしれないが、今ならこの『ランサー』とかいう二人の兄ちゃんがいるから打開できるはずだ？

「おいランサー？お前らだったら勝てんのか？」

「当たり前だ？俺を舐めてもらっちゃあ困るぜ？」

「我が主のためならば敵の首を取る位たやすいことです？」

さっきの動きを見ている限り、その言葉に偽りはないんだろう
確かにあの速さがあれば、白髪の兄ちゃんの双剣にも対抗できる
それが二人もいるのだから勝てるだろう

……しかし、問題はすでに士郎が殺されていないかということだ
少しだけならば逃げることも出来るだろうけれど、それが続くとなると厳しいものがある
頼むから生きてくれ……？

「おい？士ろ……………」

「な、何だありゃあ？」

「……………どういうことだ？」

戦闘音が聞こえてきた方に向かい、士郎を呼ぼうとして、途中で止まった

士郎を追っていた奴が戦っている

だが、そいつと戦っているやつが問題だ
全く同じなんだ、戦っているやつが

容姿も、武器も、服装までもが同一のものだ

ランサー二人も驚いている位だから、常軌を逸しているのだろう
……………にしてもなんで……………

「あ！武蔵、無事だったか？」

「そりゃあこっちの台詞だ……………なにあいつ」

「知らん。ごちゃごちゃやってたら何時の間にか出てきてた」

「……………お前もか？」

「え？　どういうこと……………ってああ……………」

士郎が俺に気づいて駆け寄ってきて、俺が言うべき台詞を先に言いやがった

それで、俺の後ろにいる奴らをみて納得したっぽい

……………こいつら本当になんなの

「……………ってお前！　どうしてお前はこんな美少女を連れているんだア
アアアアアアア？　クッソ羨まし……………もとい妬ましい？」

「それほとんど意味変わってないじゃねえかよオオオオオオオオオオ？
俺だってこいつ目的で死にかけてた訳じゃ無いんだよ？」

「そ、そんな……………マスターは私にご不満でもあったのですか……………？」

「あっ？　いやそういう意味じゃなくて？　ただ状況説明のためにだな？」

士郎の背後から金髪の美少女が現れた

多分、状況的に俺のランサーみたいな存在なんだろうけれど……………

…ああ？　憎しみで人が殺せたら？

必死に士郎が否定しているのをみて少女が影を背負いはじめて慌てて弁解しようとする

……………リア充滅びろ

「デメエ！別のマスターか？」

「えっ？ちょっ？待て？」

「貴様……槍兵か？……マスターはお下がりで下さい、瞬く間に切つて捨てて見せましょう」

「おい？やめろ？」

なにやら物騒なことを叫び始めるランサーとか言うやつと、美少女が互いに構え始める
……さっきからの状況を考えると……ってやばい？

「お、おいお前？ちょっと彼奴ら止めろ？」

「……よろしいのですか？マスターを助けるだの……」

幸いにも、礼儀正しいほうの兄ちゃんは落ち着いていて、訝しげに質問してくる

あーもう？面倒くさいなあ？

マスターとかも良く分かってねえのに？

「いいから止めろ？それに彼奴が士郎だ？」

「承知しました。では……」

瞬間、今にも切りかからんとしていた二人の間に割って入っていった……は、速い……

そのまま、二人に二本の槍を向けて制止させる

「お二方、我らが主に戦いの意はないとのことだ。ここは一旦引いてはいかがか」

「そ、そうだよテムエラ？一先ず話し合おうぜ？なあ士郎？」

「あ、ああ？そうだとも？止めてくれセイバー？」

「……つち！しゃあねえな？」

ふう……助かった

渋々ながらも槍を引いてくれた
つとお、士郎はどうなんだ……

そう思い、士郎の方を振り返ると信じられない光景があった
さっきまで気然としていた少女の驚愕している姿があったからだ
しかも、割り込んできた方のランサーをガン見しながら

「あなたは………？」

「………どうかしたか？」

「い、いえ………何でもありません………」

……何だってんだ……？

s i d e

凜

「こ、これはどう言うこと………?」

一人走り出したアーチャーを追って、私は衛宮君の家まで来た
しかし、そこには私が到底想像をしていなかった光景が広がっている

「な、なんでサーヴァントが5人もいるのよ?」

一人は私のサーヴァントのアーチャー
それは分かる。アーチャーが衛宮君の姿を見たとき突然追いかけ始
めたんだから

問題は他の四人だ
この場には人間が、私を除けば二人いる

一人は衛宮君、もう一人は服部君だ

二人がそれぞれ『英霊召喚』したとしても人数が足りないというより、一人のマスターが二人以上サーヴァントを喚ぶなんて聞いたことがない？

しかも、アーチャーと相対してるサーヴァントの姿が何処からどう見てもアーチャーそのものだ！
何が起こってるっていうのよ？

「はあ……なあ、そろそろやめにしないか？これ以上やっても無意味だろ？」

「黙れ？その口を閉じろ？」

「……頭に血が上ってたらどうしようもないだろ。仕方ない………」

相手は、アーチャーの武器と同じ『干将 莫耶』を消すと、機械的な武器を取り出し展開する

……あれも武器かしら？

そう考えていると、相手から魔力でできたような鎖が飛び出てきた

「『チェーンバインド』？」

「ぬうつ？な、なんだコレは？」

「これは相手を捕縛する為の……魔術だ。いいからちょっと落ち着

いてくれないか？」

「……アーチャー、相手のいう通りにしなさい。こうされたら手出しができないわ」

このままだと、アーチャーはこの男に倒されてしまう
そうになったら、私はここでリタイアになる
それを避ける為に、指示をだす

「……了解した。……しかし、すまない凜。こうも簡単にやられるとは思わなかった……」

「……気にしないでいいわよ。まさか私も相手が四人もサーヴァントを抱えてるなんて思いもよらなかったわ」

学校でこの二人は倒しておくべきだった
あの時、私が躊躇わなかったら逆にサーヴァント四人を倒すことが出来たというのに……

不幸中の幸いが、このサーヴァントは私達を殺す気はないということころだろうか……

「待ちなさい？早くそのサーヴァントを倒してしまいなさい？」

「そうだ？お前何見逃そうとしてんだ？」

「チャンスを不意にするつもりか？」

……やはり、他のサーヴァントは見逃してはくれないようだ
そりゃ私だったら即座に斬り捨てるように命じるだろうし、サーヴァントは普通そうやるものだ
しかし、それを聞いても男はアーチャーを攻撃しようとし
ない
……何がしたいんだろうか？

「まあ、皆も落ち着いてくれ。俺としては倒してもいいんだけど、この状況に追いついてない奴が二人いるからさ」

「誰ですか？その愚鈍な人物は？」

イライラしているのか、噛み付くように金髪の美少女が叫ぶ

……あの子のようなサーヴァントが欲しかったわ

アーチャーのことは認めてるけれど、どうせなら可愛い子のほうが

……

って、言ってる場合じゃない！

下手したら、あの男のいう事を無視して襲ってくるかもしれない

……私がなんとか物事を運ぼうとしたとき、男が親指を後ろに向かつて指す

「そこにいる俺達のマスターと、そのお友達のことだけど？」

「……え？」

「……………土郎、俺達『愚鈍』だってさ。いきなり現れて酷くない？」

「……そりゃあさ、状況に追いついてないのは事実だよ。でも愚鈍ってなあ……」

「……なあ、俺達なんかしたか？普通に暮らしてただけじゃん。普通に学生生活送ってただけじゃん。それなのに訳が分からないまま面倒事っぽいのに巻き込まれたり、殺されそうになったり、挙げ句の果てに終いにゃ美少女からの罵倒だぜ？ソッチの気がある奴らならご褒美だけど、俺には突き刺さるだけだったのに……」

「……武蔵、強く生きよう。俺だって辛いんだ。しかも俺の場合、あいつからは敵意を通り越して剥き出しの殺意を向けられてるんだぞ？なんて見ず知らずの奴にあんなに恨まれなきゃいけないんだ……。いや確かに気に食わないのはこっちもだけど酷すぎるだろ……」

そこには、雨雲を背負って互いに傷を舐め合っている二人の姿が……
……なんだ、この二人いきなり巻き込まれたのね
だから事情が分かっていないと……

でも、この二人からは『魔力』を感じないのだけれど……どういうことかしら

魔力封じでも使ってるのか、隠蔽が上手い実力者か……

「あ……あの、すみませんでした……。まさか貴方を指しているとは露知らず……………ゴメンなさい」

「……………いいんだよ。普段から馬鹿にされてるから受け流せるか

ら。……ちよつとこたえるのも事実。でも士郎のほうが落ち込んでるっぽいし、俺の方は気にするな」

「……………いや、なんかコツチこそ悪かった。事情も分かってない状態で君達を何か召喚……であってるか？まあ、それしちやって……。会話から察するに俺は君達からすると意味が分からないことをしてるんだろ？不適合者でゴメン……」

「い、いえ！こちらも先入観から物を語ってしまいました？いくらかはこちらにも非があります？」

……………あまりの落ち込みように、あの子がすつごくフォローしてる……

普通サーヴァントなら『聖杯戦争』の事をマスターが知らないなんて言ったら怒りだしそうなものなのに……あ、さっき怒ってたか

「……………あー、なんだ。さっきのあの質問はそういうことだったのか……。意味が分からないっていうのは本当に何も知らないってことか……。いや、なんか悪い……………」

「も、申し訳ありません？俺の説明不足でした？何も知らない主君に対してあのような無礼をはたらくとは……。本当にすみませんでしたアアアアアア？」

「な、何だってこいつは地面にめり込むまで頭下げてんの？いやマジで気にしてねえって？そこまでやられると逆に俺が何か悪いことしたみたいじゃねえか？」

「おいなにやってんだよ？どんだけ堅物なんだよこいつ？」

「いやすまない。こんな俺みたいな未熟者に喚ばれるなんてついでなかつたというか……」

「私としては召喚されただけでも十分ありがたいのでその謝罪は結構です！頭をあげて下さい？」

「……………あのさ。状況把握してくれたのはいいけど、そろそろ話戻していいか？こつちが置いてけぼりになってるし……」

……………確かに、さっきからこちらは無かったことにされてる

私達をどうしたいのかも聞きたいし……

男の話を聞いてこちらに向き直る大所帯

……………なんでこんなにいるのかしら、頭が痛くなってくる……

side

士郎

「……………えー、つまり、貴方達は必死で逃げていたら何時の間にか英霊を召喚したってことかしら？」

「……………はい、そうです」

「まあそういうことだな」

とりあえず皆には居間に上がってもらい話をする事になった

……そして遠坂が仁王立ちしてこちらを睨みつけている

そのあまりの恐ろしさに俺は思わず正座をして縮こまり、言葉使いも敬語になっている

……なあ武蔵、なんでお前はそんなに呑気そうにしてられるんだ？
お前は恐怖を感じないのか？
しかも……………

「……………あの、服部君？」

「あ？ んだよ？」

「……………さっきから何を食べてるのかしら？」

「見て分かんねーかよ？ キムチラーメンだ。いやいや美味いぞ」

「そうじゃなくて、何で食べてるのかを聞きたいのだけれど？」

「……一々説明しなきゃならないのか？ はあー、もうやめてくれよ、
そういう面倒くさいこと。少し考えたら分かるじゃねえか。腹減つ
てるからに決まってんだろ？」

「どうして服部君はこの状況で食べてられるのかしら？」

「まったく、学校に残されて真っ暗になった後何にも食ってねえんだ
からこれくらい勘弁しろよ。それとも何か？ 心身疲れきってる俺に

対して鞭打つつもりかよ？別になんかお前偉そうだから態と反抗的な態度をとってるとかは考えてねえぞ？」

「絶対それが目的でしょ？……………なんでこんな奴が『ランサー』なんてものを、ましてや二体もだなんて……………」

「ごちゃごちゃごちゃ喧しいんだよ。反抗期ですか？コノヤロー」

「あんたが反抗させてるんでしょ？ああもう嫌だ？」

「つーかよ、そんな過ぎた事をあれこれ言ってたってしょうがねえだろうが。無駄なことすんじゃないやねえよ」

「それもそうだけど？」

……………武蔵、強い

俺だったらああはいかない、逆にやり込められるのがオチだ
本当に口が立つなあ、あいつ

……………それより、なんか遠坂の本性というか、素の性格が浮き彫りになってるような

いやまあ、こっちの方が好感もてるんだけどさ
幻滅とかそういう類ではないことをここに示す

だが、自然体であっても遠坂は武蔵に勝てない
というより、あいつが口で負ける相手なんか居るのか？

そんなことを考えていたら『マスター』が苦笑いして間に入る

「まあまあ、そんなことで喧嘩しても仕方ないだろ？遠坂も服部もここで分けにしよう」

「別に俺は喧嘩してた訳じゃないからいいけどよ。あと俺は武蔵でいいぞ」

「……なんか釈然としないけどいいわ。色々聞きたいこともあるしね」

……『マスター』すげえ

普通に仲裁に入った

俺だったら仲裁に入る度胸がない
宥められるか分からないし

「……で、聞きたいことってなんだよ？」

「なんであんた達はサーヴァントを二人も喚んでるのよ？一体どんな裏技を……」

「それは俺のせいだな」

遠坂が武蔵に噛みつき何か言おうとしたとき
マスターがそういつて手を上げる

……俺には何がなんだかサッパリだから話を聞いとくか

「そういえば、あんたのクラスが『マスター』なんていう妙ちきり

んな奴だからそれも疑問ね。そんなクラス聞いたことないんだけど？」

「あれだよ。いわゆる『イレギュラーサーヴァント』ってやつだ」

「はあ？何よそれ？どういうサーヴァントなのよ？」

「詳しいことは言えないけど、俺のクラスが召喚されたらランダムでサーヴァントが一騎増えるんだよ」

「何ですって？」

……いきなり大きい声出さないでくれよ
ビックリしたじゃないか

「じゃあなんで衛宮君はあんたとセイバーの二人を召喚できたのよ？」

「それは、俺が召喚されたらそのマスターはもう一体サーヴァントを召喚する権利を得られるっていう効果があっただな……」

「なんてインチキ？」

遠坂は更にマスターに食ってかかってるし……
というよりもはや話についていけない……

「なあそのランサーとか言われてた二人。まず『聖杯戦争』について話してくれよ。正直なんのことかサッパリだ」

「あ、セイバー俺も聞かせてくれ。未熟者とは言っても何かの役には立つかもしれないし」

「ああ、流石に何の説明も無しだったら厳しいしな」

「分かりました。しっかり聞いておいてくださいませ」

「では説明させていただきます」

遠坂がマスターにあれこれ叫んで、それをマスターが笑いながら受け流し、アーチャーが頭に手を当てているのを横目で見ながら説明を聞く

「要するに、サーヴァント同士戦わせて最後まで勝ち抜いたやつのが願いが叶えられるって訳か。面倒なシステムだな」

士郎はサバイバルゲームに巻き込まれたを知り驚愕に打ち震えている。何たって覚悟も理解も出来てない内から、命のやり取りを突き付ける何て過酷にも程があるだろ……

なにより俺はこんなのやりたくないだけ……

叶えたい願いがある訳じゃないし、人を殺すようなこともしたくない大体、そのルールに乗っ取ると士郎とも戦わなくてはいいけないじゃないかねえかよ

親友同士の決闘なんて漫画の中だけでたくさんだ

となると……やはりこれしかないか

俺のサーヴァントに向かって真剣な眼差しで見つめる

その二人も何を言われるのか緊張した面持ちで向き合う

そして……

「よし！ランサー達お疲れ様？何処へなりと新しいマスターのところに……」

「ちょっと待てエエエエエエエ？何で現界してそうそう契約破棄

されなきゃいけないんだ?」

「あまりにも早過ぎませんかムサシ様?」

「だって俺叶えたい願いなんてねーもん。正直胡散臭い大会なんかに出たくないし。俺は普通の生活を送れるだけで幸せだしさ……」

「いやいやでもだな……」

「そうされると我々が困るのですが……」

「何? お前ら叶えたい願いでもあんの? それだったらある程度は考えるけど?」

「俺は強敵と戦えればそれでいい?」

「俺は主に忠誠を誓えるだけで十分でございます」

「……………それ別に聖杯に頼る必要なくね? 帰ってもいいんじゃない? 最悪俺でなくてもいいんじゃない?」

「そんなホイホイマスターが出てくる訳ないだろうがアアアアアア? マジで頼むって? 俺これを逃したら最悪な奴にこき使われる気がすんだよ?」

「俺はムサシ様以外に仕える気は毛頭ありません? どうかお願いします?」

「迫るなアアアアア? 野郎二人に迫られても嬉しくないんじゃない? アアアア? いやほんと離れて? 暑かしい?」

大の大人に壁際まで追い詰められる俺がいる

ハハハ……何これ

なんか目が血走ってるしめっちゃ怖い

それにキモい？目の前にいる奴はどちらもイケメンだけど、こんな構図は腐った女性方にしか喜ばれないぞ？

同じようなことになってないか、チラリと俺の親友の方を見る

「……………あの、シロウ。貴方の友人はどういった人物なんですか？様々な人に会ってきましたがあの様な性格をしている人は初めてなんですが…………」

「……………長いこと付き合ってるけど、俺も詳しいことは分からない……、でも凄くあいつの性質を表す言葉があることも知っている。これ以上なくピッタリだって言葉が…………」

「それは何ですか？」

「…………『デタラメ』」

「…………なるほど」

「あいつの本質はどれだけ長くいても掴めない。精々分かることが普段は物事をテキストに流してるけど、マジになるときはトコトンマジになるってことくらいだ」

「そうなんですか…………」

……オイコラそこ

何勝手に人のことをデタラメとかテキトーとか言ってるんだよ
っーか士郎羨ましいな、そんな美少女を召喚できて

あいつにはフラグの神様でも憑いてるに違いない

今俺にすっごく懇願してる奴も女だったらよかったのに……

「いやホントお願いだよ？お前には迷惑かけないから？どんな奴が
来ても返り討ちにするからよ？なっ？」

「俺は戦わせてくれとは言いません？せめて！せめてムサシ様に仕
える許しだけでも？」

「あー、もう？分かった？分かったから？とりあえず詳しいこと聞
いてから決めるから？それまでちょっと待て？」

「マジか？いやありがとよ？」

「心よりお礼申し上げます？命に変えてもムサシ様をお守りいたし
ます？」

「か、変わり身速あ？」

「……………あの者は、神経が図太いんですね。普通、なんの見返り
もなく危機的状況に晒されたら逃げ出すというのに……………」

「……………いや、武蔵って人から頼まれたらついつい聞いちゃう性
格してるからな。要するにあいつは根っからのお人好しだよ」

コラマテ士郎

だれがお人好しだコラ

そんなお人好しでもねえよ。というよりお前以上のお人好しを探す方が難しいからな？

……でも、頼まれたら断れないのは合ってるかもな

あそこまで頭を下げられたら断ろうにも断りづらいし……

とか少し自分の甘さに反省していると、何処からか笑い声を無理矢理押し殺したような音が聞こえてきた

発生源は、叫び疲れたのか肩で息をしている遠坂の前で勝ち誇った顔をしている肌が黒い青年

士郎のサーヴァントのマスターだ

「くっ！……トコトン甘いんだな、お前。死ぬかもしれないのにこんなことに首突っ込まなくても良いだろ？変な奴だな武蔵って」

「うるへー。ついでだよ。どうせお前のご主人様はこういうのに首を突っ込みたがるだろうからな。………やれやれ、面倒ごとに関わろうとする親友を持つと気苦労が絶えねえわ」

よく考えたら、士郎はこういう人が死ぬとかいう事件は見過ごせるわけがなかった

士郎はほっとくと何しでかすか分からねえし……

普段は俺の方が面倒を起こしてるけど、こういう緊急事態のときは士郎のほうが暴走しやすいという不思議があるからな

「ははは！確かにそうかもな？俺のマスターは余計なことばかり

しそうな雰囲気があるよな？」

「あ、分かる？他の奴に言っても『絶対お前のほうが迷惑かける』
っていうから信じてくれないと思ってたぞ」

「ふん……『マスター』とやら、そのような奴に引き当てられて残念だったな。似ているものとして同情を禁じ得ないぞ」

「……………煩いな。良いだろ別に」

「アーチャー？士郎のことを『面倒ごとばかり引き起こして、フラグ乱立するだけしたあげく、馬鹿みたいにお人好しな、正直リア充爆発しろ』的な奴とはなんだ？テメェ俺の親友を馬鹿にしてんのか？」

「……………そこまで言ってないし、お前が言うな？」

まさか三人同時ツツコミとは予想外だった……
アーチャーなんでそんなに士郎を毛嫌いするんだろうか……
よく分からねえな……

「……………で、実際どうよ？士郎はこれ辞めんの？」

「辞める訳ないだろ？こんな人の命をゲームみたいに扱いやがって？そんなことが許せるか？」

「……………だよ、士郎のサーヴァント達」

「私はもとより参加するつもりです？シロウ、これより共に闘いましょう？」

「……はあ、やっぱりこうなるか。ま、俺は召喚された身だからあれこれ言えないから主人の言うこと聞くしかできないし……」

方やヤル気満々で、方やヤル気無しで士郎に従うことを公言したあれか？サーヴァントは二体召喚されると正反対の性格をした奴が喚ばれるシステムなのか？

俺的にはマスターの方が話しかけやすいな、セイバーの方は堅苦しそうだし

……とまあ、士郎を放っておくのもあれだし、死なれると目覚め悪いしな
しゃあねえ……

「……遠坂。士郎が参加するので俺達も参加するぞ。士郎はほつとくと何回『道場』送りにされるか分かんねえし」

「……道場ってなによ？」

「……こつちの話だ。気にするな」

「まあいいわ。それなら行くわよ」

「何処にだよ」

「教会よ。聖杯戦争を管理してるやつがいるから」

「は？こんな夜中に行くのか？」

「不満でもあるのかしら？わざわざ付き合ってるんだからこれくらい聞きなさい」

「……俺が気にしてんのは、どっからかサーヴァントが襲ってこないかっていうことだけど？どっかの誰かさんみたいに参加者でもないのに襲ってくるような酔狂な奴がいなかったかとか考えると普通は疑問に思うと思うけど？」

「うっ！」

言外に『ナニテメエ勝手に巻きこんどいて偉そうな口を叩いてんだコラ』と言う

しかも殺されそうになってたりもしたし、ホント半端ないんだけどアーチャーには『令呪』を使って、『許可なく人を襲わないこと』と命令したから、もう襲ってくることはないだろう。と言っているから安心らしいが、嫌味の一つは言わせてくれたっていいだろ

「それはそれとして、あんたは魔術回路を持ってるの？」

「持ってなきゃサーヴァント喚べないんだろ？持ってるに決まってるじゃねえか。今は魔力殺しつけてるから分からないと思うけど」

「……よくそんなもの持ってたわね。で、実際どれ位なの？」

「さあ？測ったことねえし、何だったら後で遠坂が測るか？」

「……いいのかしら？一応敵になる相手なのよ？」

……あ、そっか、そういえばこいつもマスターだったな
完全に忘れてた

アーチャーとマスターが被ってるから分かりづらいし……

「別に良いさ。俺はどうしても叶えたい願いがあるわけでもないし、
最悪最後に残ったのが士郎とか遠坂だったら勝ち譲るつもりだからよ」

「あら……随分大きい口を叩くのね。それじゃあまるで、『自分は
最後まで誰にも負けずに勝ち残る』みたいに聞こえるわよ？」

「は？何言ってるんだよ？俺達が負けるわけねえだろ？」

「……すごい自信ね。その根拠を教えてくれるかしら？」

いやあ、勝つに決まってるだろ

変な事を聞くなこいつ

分かり切ってるようなものをわざわざ聞き返すかね？

そんなことを考えながら俺は無駄に自信満々で答えた

「だってこいつらが『どんな奴が来ても返り討ちにする』とか、『
命に変えてもムサシ様をお守りいたします？』とか言ってるんだぜ？
だったらそうなるに決まってるだろ」

「……それだけ？」

「それで十分だ。マスターがサーヴァントのことを信じないでどうするよ」

まずは信じないと『聖杯戦争』で勝負にすらならないのは目に見える

互いに疑心暗鬼になって、自滅なんて真っ平ゴメンだ

そもそもあれだ、騙すより騙されろだ

こいつらが嘘ついてる可能性もあるけど、そんなときはそんなときだ
メンドいことはあとで考えるとしよう

でも、こいつらがそういう嘘をつくようには見えないし大丈夫だろ

「こいつらが勝つと言ったら勝つと信じて、勝てそうにないって言うなら迷わず逃げる。結局信頼が大切だぜ」

「……………たしかに武蔵の言う通りね」

「あれ？名前のほうで呼んでくれんの？いやあ遠坂は俺とは相性悪い
と思ったんだけどな」

「一応対等とは認めたからよ。正直人間としての波長はあまり合わない
気がするけどね」

「そりゃ違いない。俺もお前のような優等生タイプとは話が合わない
と思っていたところだ」

ま、『合わない』ってだけで『嫌い』ってわけでもないけどな。とかいうのは飲み込む

こういうことを言うとか相手にどう取られるかわからないし

……土郎だったら、無自覚で言うだろうけど

少なくともこいつはいい奴だろうし、魔術師としては甘いほうなんじゃね？

「つーわけだ。とりあえずそのランサー二人、ついて来いよ」

「……おう？何処までも付いていくぜ武蔵？」

「はい？例えば地獄でも貴方様のお側に付き従います？」

「………なんかテンション高いな、お前ら」

「多分喜んでるのよ。さっきのあんたの台詞を聞いて」

さっき………？

……あれか？

あんなの昔の英雄譚だったら大概のやつは言ってるようなもんじゃねえの？

「………よっぽど、彼らの人生が悲惨なものだったのかもね」

「………同情するなあ………」

……あ、なんか話し合ってる
初対面のくせに仲良いなオイ
槍兵二人はまるで昔からの友人であつたかの様にやたら楽しそうに
話している

「いやあ！俺って幸運値が低いからどんな酷いマスターに引き当て
られたと思ったら、あんまりものを知ってないってだけで他は何の
問題もないやつだから安心したぜ？」

「俺もです！これほど素晴らしい主君に仕えることができて感動の
極みですよ？俺も幸運がEしかないですし」

「俺もEだぜ？いやあ気が合うな俺たち！これから一緒に頑張ろう
ぜ？」

「こちらこそよろしくお願いします？」

「……………すっげー喜んでんのな。しかも幸運がEって……………、
たしか、パラメータとかって伝承やらで補正かかるんだっけ？…………
……………どんな人生歩んで来たんだよ……………」

「……………さあ？」

「……………私もEだが？」

「うおっ？いきなり出てくるなよ？」

槍兵二人の不遇さ（あくまで予想だが）に遣る瀬無い気持ちになったところで、弓兵が会話に入り込んで来た
さっきまで殆ど喋ってないからダンマリかと思ってたんだが……

「って、お前もE?……………うん、なんかドンマイ」

「……いや、貴様に同情されるつもりはない。それにしても、緊張感の欠片もないようだな。そんなことでは生き残れんぞ。まあその方が私にとっては好都合なのだがね」

「うっせ、テメエは俺達に攻撃できねえんだろうが。何勝ち誇った面してんだ、妙なことアレコレ言ってるじゃねえよ。てかもうお前自害しろ、その方が楽だ」

「おやおや、随分嫌われたものだな。まあ嫌われるのも道理だが忠告位は受けて置いて損ではないと思うのだが……」

「何処の世界に敵意剥き出しにしてる奴にアドバイスする馬鹿がいるんだよ。大体今は少し同情したろうが。それをお前が嫌な口調で返すところから嫌味まで言ってくるからこうなんだろうが。意図的に嫌われようとしてねえか？」

「それこそ当然だ。敵と慣れ合うのは無意味だ。嫌われて挑発できるほうが勝負ごとでは有利に動くだろう？」

「あっそ……………そこらへんよく分かんね。お前に似た奴は結構友好的だし……」

そう言ってマスターを指差す

さっきから士郎に色々話してて、俺のサーヴァントとも仲良さげに話してる

だいぶ社交的だな

しかし、それを見てアーチャーはしかめっ面をする

「……………自分と似た存在というのは気に食わんのは事実のようだ。奴をみてると苛立ってくる」

「そうか？俺は自分に似てる奴がいたら……………うわぁ面倒くさそう」

「ふっ。自分でもそう思うような性格をしているのかね？だったら改めてみたらどうだ？少しはマシになるかも知れんぞ」

「だったらお前もそのひん曲がった性格なんとかしな。人のこと言える立場かお前？」

「それもそうだな……………」

「アーチャー、武蔵、行くわよ」

俺とアーチャーで嫌味の応酬タノシイオハナシをしていたら遠坂が話しかけて来た
ああ、準備できたのか……………って、セイバーさん？何故合羽を着てるんで？

「どうもセイバーが霊体化出来ないらしくて、これではれないよう

にしてるんだよ」

「……………すっげー不満そうな顔をしているけど？嫌なんじゃないの？」

「仕方ないだろ、他に着られるもんがないんだから」

「……………」

「おーい、凄い怒っちゃってるよ。なんか不満オーラがプンプンしてるよこいつ。口真一文字だし完全に嫌がってんじゃないか。ったく、これだから男としか住んでない野郎ってのはダメなんだよな」

「そりゃお前もだろうがアアアアア？大体男の家に女性用の服があると思ってるのかアアアア？あるわけねーだろ！あったらそいつ唯の変態だからな？」

「……………分かってねえな。男が変態で何が悪い！男は須らく変態だ？それを認めるか否かでレベルが極端に差がつくんだぞ？」

「何力説してくれてんだ武蔵イイイイイ？大体それ今の状況に関係ないからな？如何に変態であることが証明されても女物を持つてるのは絶対変だからな？」

「いやまあその話は置いて、俺が言ってるのは、女だから男物でも違和感ないと思うけど？ってことなんだが……………。士郎の服でも貸してやればいいのにつて」

「……………あ、そっか。その手があったか……………」

「その後それを士郎が着て色々やって……、お前の方が変態じゃねえか？」

「勝手に妄想して暴走すんなアアアアア？もうやってらんねえよ？」

「はい、どうもありがとうございましたー」

「ありがとうございましたー……って漫才やってるわけじゃねえよ？」

「ナイスノリツツコミ」

「……………行くわよ」

呆れた様子で俺達を眺める遠坂の言葉で、慌てて玄関まで走っていく俺達だった

第四話、食べ物の恨みは恐ろしい

side

士郎

『聖杯戦争』について聞きに行く為に教会に行くことになってしまった

……………行くことになったんだが、武蔵がやたらと行くのをしぶりだす

今も柱に張り付いて、ランサーに引っ張られてる

「い、行きたくねえ？やっぱお前らだけで行ってくれ？」

「……………なあ武蔵、何怖がってんだ？」

「は、はあ？別に怖がってねえし？なんで怖がらないといけないんだよ？逆に怖がらなきゃいけない理由が分からないんだけど？」

「ああ、そういえば武蔵って幽霊とか怖かったっけ？」

夜中だしな、しかもいくところが教会

……………怖いんだろうな、武蔵にとっては

どうもあいつは昔っから幽霊とかの類が苦手らしい

この前なんか、ゾンビを倒すゲームやってるだけで喚いてたし本人は必死に否定してるけど、傍から見ると丸わかりだ

今もなんか首を横に振ってるし

「な、なに言っただよ士郎？幽霊の何処が怖いっただよ？むしろ怖いところについて教えて欲しいんだけど？大体居もしない存在を怖がる必要を感じねえわ？」

「……サーヴァントも幽霊みたいなものなんだけど？」

「……え？マジ？」

「だったら、幽霊も居るかもしれんな？」

「ウエ？そ、そんなわけ……」

「そうかもねー？案外その角を曲がったりなんかしたら出てくるかも……」

「な、ないな。それはない？」

「いやいや、いきなり背後から冷たい手でも置かれるというの……」

「やーめーろーよー？なんなの？そんなに幽霊いることにしたいの？だったらいいよ、居るっていうことにしとくよ？でも怖がってはないからな？毛ほども怖くないからな？」

「……………あ、幽霊」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア？」

武蔵の弱点を見つけ、此処ぞとばかりに反撃してくる遠坂とアーチャー

……さっきやり込められたりしてたからなあ

二人の言葉ひとつひとつに怯えていく武蔵

めちやくちや良い笑顔してんなあ……

っーか最後煩い

「怖がってるじゃない。好い加減認めなさいよ」

「べ、べべべ別に怖がってねえし？怖がってる様に見えたならお前の目が悪いだけじゃねーの？」

「いや完全に怖がってるようにしか見えないが？」

「怖がってねえつつってんだろ？怖がってる本人が怖がってねえって言ってんだから怖がってないってことでいいじゃねーかよ？」

「今認めたわよね。怖がってたって」

「あーもういい？じゃあいよいよ怖がってるってことで？本当は怖がってないけどね？お前らがそう言うってんだからもうそれでいいよ？」

「そうヤケになるな。………ククク」

「ソコオ？誤魔化せてないぞ？」

……アーチャーも笑うレベルかよ
他の奴らも肩を震わせてるし……

あ、セイバーまで……

いや、辛うじて堪えてるか

「……なあセイバー。そんなに笑えることか？」

「え、ええ、つい笑ってしまいますね」

「そうなのか？」

「はい。先ほどまであれほどのプレッシャーを放っていたリンをものともしていないというのに、幽霊で怖がるというのは……クスッ」

あ、耐えきれなかった

………：そうか、俺もかなりビビってたのに武蔵だけ平然とラーメン食ってたし

しかもランサー達にあそこまで大見得切ってたやつがあんなに怖がってるって面白いのか

俺は昔から慣れてたけど

……あ、それより

「……セイバーも笑うんだな」

「むっ。失礼ですね。英霊とは言っても感情はあるんですから笑いますよ?。」

いや、そうじゃなくてさ。女の子なのに全然笑わないから表情固定なのかと思って……

そう言いかけたけど、口に出すと余計に不機嫌にさせてしまう気がして飲み込んだ

……にしても、やっぱりセイバーって普通の女の子にしか見えないよなあ

こんな可愛い娘が人知を超える力を持つなんて……

こうやって笑ってるところとか、むくれてるところを見てたら想像も出来ないな

「……？ シロウ、私の顔に何か付いてますか？」

「ん？ ああ、やっぱりセイバーも女の子だから笑ってたほうが可愛いな、と思ってさ」

「なっ？」

……あれ？ もしかして俺、地雷でも踏んじったか？

セイバーの顔がドンドン赤くなっていくし

な、何がいけなかったんだ？

怒らせる様なことを言ってしまったのか？

「シ、シシシシロウ？ 私はサーヴァント何ですよ？」

「は、はい？それについてはよく存じ上げています？」

び、美人が怒ると迫力があるな……

さっきの遠坂の時の様についつい敬語になってしまう

「私は女だとかそういうものは捨てているのですから女の子扱いはやめて頂きたい？」

「で、でもセイバーが女の子であることには変わりはないと思うんだけど……」

「それでもです？そうやってると命取りになりますお？」

「……………あ、かんだ」

な、なぜにここまで動揺しているんだ？

そんなに女の子扱いされるのが嫌だったのか？

女心はよくわからない……

……爺さん、俺は貴方のように女性と接することは出来ません
ってかんでるし、こうしてると強いってだけで年頃の少女なんだろう
って思わずにはいられない

「かんだとかかんでないとかはいいです？問題はしっかりと『聖杯戦争』に参加しているという自覚を持ってもらわないといけないということですか？いわば戦場での緊張感というものをですね？」

「……………なあセイバー、ちょっと武蔵のほうを見てみろよ」

「はい？ どうして……」

訝しげながらも、セイバーは武蔵達の方を見た
そして言葉を失う

「しっかしなあ、俺たちちょっと戦力持ちすぎじゃねえか？ 四人と
かもはやチートだろ」

「ははは、そうかもな。俺は士郎のサーヴァントだけど武蔵もちや
んと守るぞ。マスターの意向だしな」

「何を言いますか？ ムサシ様を守るのは我々だけで十分だ？ 他のマ
スターのサーヴァントに守ってもらう必要は無い？」

「そう固くなんなよ。純粹に味方が増えたってことでいいじゃねえ
か。……でも、こっちも援助されっぱなしは性に合わない。こっち
もテメエのマスターの坊主を守ってやるぜ」

「それがいいな。ランサー、俺の緊急時以外は士郎を助ける」

「そりゃ有難い。これからも頼むぞランサー」

「……ムサシ様がそういうなら」

「はっ！ 足引っ張るんじゃねえぞ？」

「なら、精々お前らについていくとするよ」

「おお、そうだ。なんか食べれないもんとかある？今日は無理だろうけど、明日はご馳走にするし」

「マジかよ？だったら俺は肉が食いたい？」

「俺は何でも構いません。むしろそこまでして頂かなくても……」

「そういうの無し？世のお母さんが困る返事だからなそれ？なんでもいって言うっておきながら後で色々言われるお母さんの身にもなりなさい？」

「そもそも元より食事は必要無いんですが……」

「こっちのランサーは食べる気満々だからハブるのはよくない？皆で飯を食ってこそ信頼関係は結べると思うけど？」

「そ、そうですか……では失礼ながら食べさせて頂きます」

「なら俺は料理でも手伝うか。何、結構手馴れてると自負してるからまずくはないと思うぞ」

「そっか、じゃあマスターにも頼むわ」

そこには幽霊の恐怖から立ち直った武蔵と、そのサーヴァント達が俺のもう一人のサーヴァントの『マスター』と勝手に同盟を結んでいる光景があった

俺は最初からそのつもりだったからいいけど

しかし、まあ和氣藹々としてるな
緊張感の欠片もねえ

途中から明日の献立になってるし

……これだけの量だとどれ位作ればいいかな？
久々に腕になるな……

「な、な……」

「ンウエ？何をわなないてんだ？」

「どうしてそんなに貴方達は緊張感が無いんですかアアア？もつ
とこう殺伐としているものじゃなかったのですか？」

「バツカ、オメエ張り詰めすぎたらぶっ倒れるわ。そのうち緊張の
糸が切れて色々キレちまうぜ」

「私はもうすでにキレてます？もうこんなので大丈夫なんですか？」

「そう気い張るなよ。肩の力を抜け。非常事態にこそいつも通りに
生きていこうぜ。平常心を失ったやつは早死にするもんだ」

「……っああ？正論だから言い返せない？微妙に論点もズラされて
いるような気もするというのに？」

………武蔵、お前のマイペースぶりには追いつけねえよ
手玉に取るの上手いな……

あ、そうだ

「セイバーは何が食べたい？希望があればなんでも作るつもりだけ
ど」

「え……えーと………はっ？シ、シロウまでそんなこと
を言い始めるんですか？しょ、食事なんかよりも大切なことがある
でしょう？」

セイバー、無理して隠すな
今、すごい幸せそうな顔をしてたぞ
なんかまるで、『プレゼントを買ってあげる』って言われた子供み
たいな表情だった

………俺の中の悪戯心がムクムク芽生えてきた
なんか必死に取り繕う様が……
……よし

「そうか。おーい武蔵？セイバーは食事がいらないんだってさ？そ
れよりも大切なことがあるらしいし？」

「……………え？」

「お？そうなのか？だったらセイバーの分は作らなくていいか！」

「ちょ、ちょっと！」

「ああ残念だなあ？折角明日は豪勢にしようと思ってたのにセイバ

「には食べてもらえないんだなあ？」

「あ、あの……」

「本当に惜しいなあ？明日は腕によりをかけるつもりだったっていうのになあ？」

「え、う、そ、その……………」

うおう、なんか今にも泣き出しそうになってる

正直これを見ただけで許してしまいそうになってしまう
でも俺は手を抜くつもりはない

絶対にセイバーから『料理が食べたいです』って言わせて見せる

「ん？どうしたんだセイバー。希望通り食事抜きになっただけじゃないか。何をそんなに絶望したかのように落ち込んでるんだ？」

「あ、あのですね……………シロウ達が何とか私達と交流を結ぼうとしているのに、私だけ外れるのはやはりダメではないかな……って思ったりするんですが……………」

「そんなことは気にしなくてもいいんだ。俺としてはセイバーに無理にやりたくないことを押し付けるつもりはないんだから」

「し、しかしですね！郷に入っては郷に従えという言葉もありますし？それに食事自体が嫌だという訳でも……………」

「親しき仲にも礼儀ありっていうのもあるし、そこはこっちが慎ま

せてもらおうぞ。セイバーには食事より優先しなきゃいけないことがあるみたいだからそっちの方を頑張ってくれ」

「…………ふっ、どうだ、昔から武蔵と口喧嘩してたせいで結構口が立つからな

相手の弱みを握ってる時点で俺の勝ちが決まったも同然だ

我慢出来なくなったのか、プルプル震えながら涙目でこちらを睨みつけてくるセイバー

しかし、その威力は無いに等しく、むしろ可愛く見えてしまうから不思議だ

俺とセイバーの睨めっかが続き、セイバーがおもむろに口を開く

「……………シロウ、食事が……………したいです」

「分かった任せろ」

「……………いい加減行くわよ」

「……………なんだか、殺し合いに巻き込まれたはずなのに、ユルユルのような気がする」

「……………ところでそちの……二本槍を持ってた方のランサー。いい加減、その魅了の魔術解除してくれない？　すごく不快なんだけど」

道中、遠坂が武蔵のランサーに不平を言い始める

このランサー、魅了の魔術なんて使ってたのか……

確かに、街を歩いていれば多くの女性が振り返る位の美貌は持っているが、その上魅了の魔術まで……

一瞬だけだが、こいつは軽い人間なのかと邪推してしまったが、言われた途端暗い顔をした青年を見てハッと息を呑んだ

「……………すまない……………これは生まれ持った呪いの様な物で俺でも制御できん。申し訳ない事だが……………」

「……………あつそ、ならいいわ。無茶なこと言って悪かったわね」

「……………謝った……………だと？」

「何よ武蔵。何がしたいのよ？」

うん、これは予定調和というやつなんだろうか

絶対こういうしんみりした空気になったら武蔵が余計なことを言い始めるからな

これで空気を壊すからすごいもんだ

「お前の様な奴が人に謝るなんて想像できなかったからよ……」

「あんたねえ……いくら私でも自分が悪いと思ったことぐらい謝るわよ？」

「だったらアーチャーに襲わせたことと、俺たちを聖杯戦争に巻き込んだことについての謝罪を要求するぞ」

「うっ……だ、だから聖杯戦争について説明したじゃない？」

「それはそれ、これはこれだろ。大体家に上がり込んで偉そうにする時点でどうかしてるぜ」

「そ、そうなんだけど……」

やっぱ勝てねえのな……

女性が相手だろうとズバズバ言うのは武蔵の主義みたいなものだから遠慮なしだ

これは口論のみならず、リアルな喧嘩でもそうだから手に余る
決して自分からは手を出さないけれど、相手がやってくるなら容赦なし

女だから殴らないっていうのは通用しない

男女平等を謳ってるからな、話し合いの余地があるなら説得なりなんなりするだろうけど

……っーか武蔵、鼻を穿るな

余計に遠坂を苛立たせるだけだぞ
意地でも謝りたくないんだな、遠坂は

「……………アーチャー、令呪をあんたに使ったら武蔵に口論で勝てるかしら？」

「……………或いは可能かもしれんが、危険な賭けだぞ。そもそも、そんなくだらないことに使う意味がない」

「分かってるわよ……………ただ、聞いてみただけ……………」

「フツ……………あの手のものはまともにやり合うのは得策ではないということだ。弱みでも握れれば……………いや、あいつはそれでも黙りそうにない……………」

……………英霊からも認められるとか、どんだけなんだよ武蔵
そんなことを言ってる間に、何時の間にか教会に着いていた

重々しいドアの開閉音を耳にしながら、俺達は教会の中へと入っていった
物々しい空気が流れて、日常とは違う世界に圧倒され俺は思わず息を呑む

温かみを感じない、人間が救いを求めにやってくるような場所には到底思えない位に
こんな、荘厳であり、冷徹ささえも感じさせるような異形の世界で、懺悔しに來た人たちは心の内を吐露できるのだろうか

「つたく、出来れば会いたくなかったわね。あんなクソ神父なんかには……………武蔵、何してるの？」

「ななななななんでもねえよ？わ、悪いけど俺は外でサーヴァント達と会話してくる？」

「……………武蔵、話だけでも聞いとかなきやいけないだろ？そんなに怖がるなよ」

「だ、誰が怖がつてるってんだよ？じゃー分かったよ？士郎は俺の側でちゃんと俺を見守っておくがいいさ？」

そう言っ、武蔵は即座に俺の近くまで駆け寄って來た
……………マジで怖いんだな

シリアスだったのに、微妙な空気が流れ始め、なんとも言えない状

況になってしまった

この空気を断ち切るために、話題を変える

「……………にしても言峰、さんだっけか？」

「そう、言峰綺礼よ。もう十年以上顔を付き合わせてる腐れ縁。出来れば知り合いたく無かったけど」

俺の問いかけに対して苦々しげに言い放つ遠坂

しかし、嫌い、というよりも憎悪を持っているかのような物言いに少し首を傾げる

魔術師としての兄弟子ではなかったのだろうか？

だとすればもう少し親しげになれるというものではないのか？

「同感だ。私も師を敬わぬ弟子など持ちたくは無かった」

「……………っ」

重厚な印象を受ける教会からの先入観からか、てっきり神父は老人であると思い込んでいた

少なくとも、神父に相応しい雰囲気を持っている人物だろうとは考えていたが……

全く予想とは違う人間だ

とても神に仕える聖者とは思えない大柄な体格と、こちらを射抜き、人を品定めをするかのような視線

肩に鉛でも載せたのではないかと勘違いするほどの威圧感を、この

神父は持っていた
会話――というより、喋っているだけだというのに俺の何処かがア
ラートをならす

「少年、何を構えている？」

神父は愉快そうに笑った

見ると、自分の足が勝手に後ろへ動いていた
思わず引き下がっていたらしい……

だがそうさせたのはこの神父からの恐怖というより、肌に纏わりつ
くもつと嫌な感覚が圧したから

コイツは気に入らない

端的に言えばそういう結論を下すことになる
今なら遠坂の微妙な反応を理解することができる
この神父からは、生理的な嫌悪しか感じない

「……………なああんた、本当に神父か？オーラが完全に他者に圧力
をかけてるようにしか感じらんねえんだけど」

「ちょ、武蔵？」

唐突に武蔵が話をきりだす

その内容は、初対面の人間に対しては非常識にも程がある質問
しかし、初対面の人間であるからこそその疑問点だ

制止したにはしたが、俺にだって気にかかることなんだから
神父は、武蔵の非常識な言葉にも静かに手を顎に当てて考えるよう
な仕草をしてから返答する

「ふむ………つまり君は私から威圧感を感じたものと見ていいか
ね？」

「まあそうだな」

「だとしたら、悪かったとしか言えないな。なにぶんこれは私の性
分みたいなので変えることは不可能に近い」

「よく神父になろうと思ったなお前」

「父が神父だったものでな。それに憧れたはいいが、まだまだ父に
は及ばん様だ」

……こいつ、表面上は申し訳なさそうな顔をしているが、それを治
そうなんてさらさら思っていない
むしろ、それで自分は完成されているかのような、そんな獰猛な眼
をしている

残虐

この眼を形容するとしたらその言葉がしつくりくる
こいつはやるとなれば何の躊躇もなく人だって
殺せるだろう
むしろ喜々として傷を抉るぐらいしそうだ

「綺礼回りくどいことはしないで。私は彼らに事情を説明して欲しいだけなのよ」

「ふむ、それもそうだな……だがー」

遠坂の言葉でようやく説明しようという気になったのか、思い出したような顔をして笑みを消し、再びこちらを向く

「話をするというならまず名前をそちらから名前を名乗りたまえ、話はそれからだ」

「まったく、いちいち胡散臭い野郎だな。俺は服部武蔵だ。覚えなくていいぞ」

「俺は衛宮士郎だ」

武蔵が嫌味を言いながら名乗ってから俺は名前を言う

「ー不意に空気が変わる

気づくか気づかないかぐらいの一瞬のことだが、神父の目が驚きで見開かれた

「エミヤ、シロウ?……………衛宮」

と、神父は静かに、何か喜ばしいモノに出会ったかのような愉悦に、口元を歪がめた
ぞくりと悪寒が背筋を走る

「……………そういうことか。よかろう、君達を歓迎する。七人目と八人目のマスターよ」

……マスターだと気づかれたのかと思ったが、よく考えると令呪を隠すのを忘れていた
遠坂は八人目が出たことに驚いていたが、神父は全く気にかけていないのか
ーそれとも、『衛宮』という名前を聞いて些細な事だと判断したのか、その事には触れないで話を進める

「マスターになった者は、ここに届けを出すのが決まりとなっているのだがな。結局、現れたのは君達だけ――魔術師たちは、こちらのルールに従うつもりはない、というわけか。そのぶん、誠意を示した君達には、出来る限りのもてなしをしよう」

「……べつに、俺はアンタと馴れ合うつもりはな「だったらなんか飯でもくれよ。さっきから腹がなってしゃーねえんだわ？」

「武蔵は少し自重しやがれエエエエエ？お前さっき食ったばっかじゃん？さっきキムチラーメン食ったばっかじゃねーかよ？」

言い返そうとして、武蔵が話に割り込んでくる

…………あのな、少しは落ち着けよ
本当に予想も出来ない事をするなあお前は？

「ああ？無茶言うなよ？こちとら重たい空気には耐性ねえんだよ？
しかもなんだかんだで腹減ってるし？ここまで威圧されてたから嫌
がらせしてやろうと思ったただけだ？」

「だからっていきなり飯が用意できる訳……」「麻婆豆腐ならあるが
……」

「あんのかよオオオオオオオ？つーかなに？なんで教会で中華食っ
てんの？違和感しかないぞ？」

「って綺礼！まさかあれを食べさせるつもり？なんて事を……？」

「……………食べるか？」

「……………食べるか！」

「……………食べるか！」

遠坂がなにやら慌てだした

……………なんでさ？

そう疑問に思うまえに俺と武蔵の言葉が被った
しかし、その言葉の意味するところは違う

俺は『そんなものこの状況で食べるか！』という意味

武蔵は『腹減ってるし、折角だしてくれてんだから食べるか！』と
いうことで……

「ちょ、ちょっと武蔵？悪い事は言わないわ？今すぐ断って……」
では、今持ってこよう。何、今回は奢りだ。思う存分食していくと
いい」

「じゃあ頼まあ」

遠坂が引き止めていたが、それを無視して神父は言い残すと、再び
奥へと引っ込んだ

……今から大切な話をしようって時に……
こいつは……

「おい武蔵！どういうつもりだ？」

「どうもこうも、お前言峰に圧倒されてたじゃねえか。だからこう
やっていったん間挟んでんじゃねえかよ」

「はあ？どういう……」

「あんな圧力かけられたら、お前の事だ。頭に血が上って感情的に
物をいうようになるだろ？時間を置いて冷静になっとけ」

？……………こいつ、そこまで考えてたのか
もしかして、あの急な発言もピリピリした空気を壊すためだったの
か？

……こいつ、本当に『デタラメ』だな……

意味ない発言をしたと思ったら、思わぬ事を引き起こす
……本当に、武蔵には頭が上がらないな

「まあ麻婆豆腐に興味がないって言ったら嘘になるけどな……………」
どれぐらい辛いか試してみたい」

「ああ、辛いもん好きだったしなお前」

「……………武蔵、先に忠告してあげる。食べるのやめときなさい」

そっちも気になってたか

昔から辛党だから仕方ないか……

とか話していたら、遠坂がなにやら沈痛な面持ちで食べないように
指摘してくる

……毒でも盛られるのか？

思案してると、神父が麻婆豆腐をもって戻ってき……たアアアア
ア？

な、なんだあれは？

これほどまでに距離が離れているというのに、眼に突き刺さる様な
香辛料の多さは？

軽く涙が出てきてるぞ？

「……………ふ、やはり常人には直視する事すら叶わないか。私の好
物なんだが」

「俺は貰うぜ……………本当に食ってみてえな」

武蔵が目を光らせている

かつてないほどの強敵を前に、その意欲が大幅に上がっていることがわかる

……そういや、武蔵の辛党も半端なかったよな……

武蔵が神父から貰ったレンゲをとって麻婆豆腐へと突っ込み、すくい上げ口に運ぶ

でも、あの劇薬と言っても差し支えないような物までは流石に……
……

「……ウマ？美味しいなこれ？この辛さがなんとも言えない？いくらでもレンゲが進むぜ？」

「う、嘘オオオオオオオ？」

「はっはっは。そうかそうか、まだまだあるぞ。満足するまで食べていけ」

武蔵がマーボーを口に放り込んだ瞬間、顔が輝いた
追い求めていたものがそこにあったかの様に

その光景を見て、遠坂が珍獣を見たかが如し驚き、神父は先ほどとは違う笑みを浮かべていた

……もしかして美味しいのか。あのラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあげくオレ外道マーボー今後トモヨロシクみ
たいな料理が美味しいのか

「いやあ、これは士郎には食べられねえぞ。凡人には耐えられない代物だ」

「そ、そうだよな……そうに決まってる」

あんなもの、常人が口にする事が不可能だ
マーボーを貪り始めた武蔵を他所に、俺は再び神父に話しかける

「……俺が訊きたいことは、そんなに多くない。

聖杯とは、聖杯戦争っては、いったい何なんだ？ どうしてこんな……ふざけた殺し合いをしなくちゃならない？」

「……………何も聞かされていないのか？」

「何もってわけじゃない。俺達はもう、サーヴァントと契約している。ある程度ルールも把握しているつもりであるし……戦わなきゃならないこともわかる。

だけど、どうしてそれが俺達なんだ？

マスターっていうのがちゃんとした魔術師になるってんなら、もつと他にいるだろ？」

……そう、一応は魔術師であるが、俺達はそんな事情を知らない、完全に蚊帳の外の存在だ

例えば遠坂は、ずっと前から聖杯戦争というものを知っていたのだろう

知った上で準備し、聖杯を手に入れるという目的のために、自分の意志で参加した

他のマスターも同様だと考えられる

しかし、だったら俺達は何のために？

俺達が戦うための理由ではなく、俺達が戦わなければいけない理由を知りたいと思った

「本当に知らないようだな　——　よかろう。

まず、君達が巻き込まれたこの戦いは『聖杯戦争』と呼ばれるものだ。

本来なら七人のマスターが七人のサーヴァントを用いて繰り広げる争奪戦——という事ぐらいは聞いているか？」

「ああ」

武蔵も首を縦に振っているのを見て神父は続ける

ちなみに、武蔵は口をいっぱいにしていてため喋られない

「では、先に君の勘違いを正そう。令呪とは聖痕でもある。都合が悪いからといって放棄する事はできん。その痛みからは、聖杯を手に入れるまでは解放されない」

「……………」

「——　故に、これは誰かに選定されたものでなく、マスターとなった者へ与えられた試練である」

……誓ってもいい。この神父は聖杯戦争とやらを、これっぽっち

も『試練』だなんて思っていない

「まるで『運命』の所為だとも言いたげだな」

「その場合、神に仕える身の私はもつと別の言葉を使うが。

そうだな……、そこに何かしらの意思があるかどうかまでは分からないが、強いて言えば、決めたのは聖杯自身ということになる。マスターを選ぶのも、サーヴァントを呼び出すのも、すべては聖杯自体が行うこと。

自らを持つに相応しい人間を選び、彼らを競わせて、ただ一人の持ち主を選定する。

聖杯戦争とは、聖杯に選ばれ、手に入れる為に殺し合う降霊儀式というわけだ。

報酬は、如何な望みをも叶えること。異存はあるまい」

「そんな聖杯が——アンタの言う聖杯は本物なのか？」

「勿論だとも。この町に現れる聖杯は本物だ。その証拠の一つとして、サーヴァントなどという法外な奇蹟が起きている。過去の英霊を呼び出し、使役する。否、既に死者の蘇生に近いこの奇蹟は魔法と言える。これだけの力を持つ聖杯ならば、持ち主に無限の力を与えよう。物の真贋など、その事実の前には無価値だ。

具体的に説明すれば、この町に伝わる聖杯は霊体。

器物として有る訳でなく、特別な儀式を行い、降霊することによって出現する。

霊体には霊体しか触れることが出来ず、故にサーヴァントが必要というわけだ。分かったかね？」

それで、納得しろとでもいうのだろうか

聞けば聞くほどこいつの言葉は、タールの様に粘っこく、いちいち癪に障る

武蔵は全く気にかけていないのを見てると、少しは落ち着くと思っ
たが……

悪い武蔵、お前の気遣いは無駄に終わりそうだ

——— 今の説明で、あることに気づいた

「ちょっと待て、何かおかしいぞ。今の説明じゃ、聖杯を手に入れるのに必要なのはサーヴァントだけっていうことになるんじゃないのか？ 逆に言えば、使役するだけのマスターの生死は関係ない。少なくとも、マスター同士が殺し合う意味はないんじゃないのか？」

「なるほど。そういう考えもあるか……」

神父は感心したように呟いた

勿論、それは酷く演技めいたものであったが

「衛宮士郎、では訊ねるが、参戦するとして、勝ちに徹するなら、おまえはどう戦う？」

もっと言えば、君は自分がサーヴァントより優れていると思えるか
？」

「……あ」

そういうことか……

「そう、サーヴァントはサーヴァントをもってしても破りがたい。だが、一方でサーヴァントはマスターがいなければ存在できぬ。ならば、答えは単純。マスターを殺す事が、サーヴァントを倒す最も効率的な手段となる」

それもそうだ

アーチャーだって言ってたじゃないか

『マスター一人殺せるのは破格だ』って

「———そういうことだ。過去、繰り返された聖杯戦争はことごとく苛烈を極めてきた。マスターたちは己が欲望に突き動かされ、魔術師としての教えを忘れ、ただ無差別に殺し合いを行ってきた。今回だけは違うという根拠は、何処にもありはしない。むしろ、そうなって然るべきだろう」

「……………」

「容赦のない殺戮の儀式、とくに、勝手もわからず巻き込まれたとなれば、それを嘆くのも無理はない。マスターを放棄したいというなら、それもまた選択肢の一つだろう。

なに、令呪は使えば無くなる。マスターの証が令呪ならば、逆を言うと、使い切ってしまうえばマスターの権利を失うということでもある。そうしてサーヴァントとの契約を断った場合は、聖杯戦争が終わるまでの君の安全は私が保証しよう。これも決まりでな、マスターでなくなった魔術師を保護するのは、監督役として最優先事項な

のだよ」

神父——いや、言峰の声は変わらず淡々としているというのに、俺の頭に嫌に染み付いて離れない
最早、こいつの声を聞くだけで精神が侵されるかと錯覚するくらいの嫌悪感さえもある

「だが、ものは考えようだぞ、衛宮士郎

聖杯を手に入れ、己が望みを叶える。要は、君が勝ち残ればいいだけのこと。そうなれば何もかもが元通りになる

そうだ、その目に見えぬ火傷の跡を消すために、すべてを初めからやり直すことだって可能だ」

「——っ?」

「十年前——、この街に住む者なら誰もが知っている出来事を、まさか忘れたわけではあるまい。

死傷者五百名、焼け落ちた建物は実に百三十四棟。未だ以て原因不明とされるあの火災こそが、聖杯戦争による爪痕だ。

聖杯は万物、望むままの願いを叶える。

その災厄さえ無かったことにし、失われたものすべてを、おまえを縛る『衛宮』の名を捨て、本来の自分を取り戻す事とて可能だろう。故に、望むがいい。もしその時が来るのなら、マスターに選ばれた幸運に感謝するのだからな」

言峰の顔に喜色が浮かぶ

と、同時に、俺の視界がらりと揺らぎ、そして、あの忘れようのない灼熱の地獄が脳裏に浮かぶ

灼熱で、紅蓮に染まっていく大地

少し前まで人間と呼ばれていた黒い物体が無数に横たわる生き地獄
どれほど救いたいと思っても、手を差し伸べることさえできなかった
怨恨の中を懺悔しながら歩いた遠く、だが、俺の根底に焼き付いて
いる罪の象徴

……………あれを無かったことにできるといえるのか？

だったら俺は……………

「……………アホくさ……………何言っただこのスカポンタン」

「……………ほう。君は取り戻したく無いというのかね？あの時の惨劇が
なければ、君の本来の肉親も死なずに済んだかもしれないというの
に？」

武蔵の声で我に帰った

……………一体俺は何を考えて……………

「どうでもいいっつーの。今は普通に幸せだし、どうせ俺はあれより
前の記憶なんぞ残ってねえし、今更親を恋しく思うのもおかしい

わ」

「なら、その時失われた記憶を取り戻せばいい。それくらい聖杯ならば容易いことだ。いい気分のするものでは無いだろう、自分の過去を誰よりも知っているはずの自分の中に存在しないというのは」

「過去に戻ってどうすんだっつーの。過去のことなんか知ったことじゃない。もう未来に進むので精一杯なんだよ」

……そうだ

過去なんかやり直しできるはずが無い

そんな簡単なことを忘れてしまっていたのか

言峰の言葉には洗脳する魔術でも仕込まれているのか？ ついつい乗ってしまいそうになっていた

甘言で人を誘惑する『悪魔の誘い』のように

ーにしても、武蔵は本当に動じないな

自由奔放で風みたいなやつだからか

俺と同様に、言峰に嫌悪感を抱いているのに構わずズバズバ言いたいことを言い切ってる

普通のやつなら躊躇うようなことや、ふと考えてしまうようなことを『どうでもいい』と切り捨てる
変な奴だ

そして、気にかかったことがもう一点

「さっきから聞いてると、まるで俺のことを知っているみたいな言い方だな。俺の方はオマエのことなんか、まったく知らないのに」

ふとよぎった疑問。それを口にした
だが、それは何か琴線に触れたのか、ぴくりと言峰の表情が動く

「……ほう。興に乗って、少しお喋りが過ぎたか。まだ時期尚早だったと見える。傷を切開し、救いを与えるのは、また次の機会としよう」

「俺は質問したはずだが？それとも何か、答えられない理由でもあるのか？」

「私にとっての不都合は何もない。むしろ、それを聞いて後悔するのは君の方だ。どうしても知りたいというのなら答えもするが、本当にそれでいいのか？」

もう、隠す気すら失せたまま愉悦を顔に浮かべて、言峰は言った
やっぱり、この状況を愉しんでやがる

俺たちが必死に足掻いている姿を観察することは、こいつにとって
娯楽を楽しんでいるのと何ら変わらないのだろう

こんなもの俺の先入観だが、それは間違っていない気がした
俺の無言を肯定と受け取り、言峰は話し始める

「断言してもいいが、私は今、目の前にいる『衛宮士郎』という少年のことを、詳しく知るわけではない。但し………」

「但し？」

「……………但し、『衛宮』という名前とは面識がある。過ぎるほどにな」

「どういことだ？」

「どうもこうもない。衛宮の名を持つ者がもう一人いる、否、いたことは知っているはずだ。端的に言えば『衛宮切嗣』を。10年前の聖杯戦争でマスターだった男だ」

お、親父がマスターだっただと？

「少し考えれば、すぐに分かることと思うが？ 聖杯戦争の爪跡である大火災に魔術師が居合わせたことを、只の偶然と思うか？ 気づかなかったのだとすれば、余程の間抜けか、無意識に見て見ぬ振りをしていたのだろう……そのどちらでも構わないが、これは事実だ。故に、私は最初に君に質問したはずだ。『何も聞かされていないのか？』、と」

「……………」

驚いた

驚いたけれど、こいつの話を否定することができない

当初、親父は俺が魔術を学ぼうとするのを非常に嫌がっていたそれは、また聖杯戦争が起きた時、俺が巻き込まれる事を危惧して

いたのなら……………

「ちなみに、私が衛宮切嗣を知るのは、何も監督役だからというだけではない。なにしろ前回は私もマスターだったからな。もつとも、他のマスターたちはどいつもこいつも化け物揃いで、真っ先に脱落したが。私ではそれが限界だったのだろう。戦いを回避した男には、聖杯など手に入らなかった。脱落した後は当時の監督役だった父に保護され、以後はその任を私が引き継ぎ、この教会で聖杯を守っているというわけだ」

その時、俺は事実を受け入れるのに苦心していて気づかなかった

……武蔵がすっごく言峰を胡散臭そうに睨みつけていたのを

その眼が、言峰が隠していることを見通すかのように

「衛宮切嗣は、その化け物揃いのマスターの中でも、抜きん出た存在だった……もし望むのであれば、おまえが知らない衛宮切嗣を語って聞かせてやるのもいいが……どうする？」

「……………いや、いい。これで質問は終わりだ」

「そうか。では、話しはここまでだ。ところで、私はまだ肝心な言葉聞いていない。この戦い——『聖杯戦争』に参加するか否かの意思を、宣言したまえ」

……………そんなもの問うまでもない

「決まっている。俺はマスターとして戦う」

そうだ、今更の変更はない

言峰が何を言おうとも、とっくに決めたことだった

「ただ、おまえが言うように、聖杯が欲しいから参戦するわけじゃない。他のマスターが平気で人を殺すような最低なヤツだったら、何としても止める。十年前の火事の原因が聖杯戦争だっていうんなら、俺は、あんな出来事を二度も起こさせる訳にはいかない」

聖杯なんていう怪しいもののために命を懸けることはできないけれど、そのために引き起こされる馬鹿げた殺し合いを止めるためだったら俺は戦える

そうするだけの理由と意思は間違いなく俺の中にあった

「今はまだ救いより、自らの願望を選ぶか………それもいいだろう。君をマスターとして認める。この瞬間に今回の聖杯戦争は受理された。存分に戦い合え」

開始の宣言を言い放つ

戦いは既に始まっており、宣言には何の意味もない

一応、形ばかりの礼をし、背を向けて出口に歩き出そうとしたそれに従い、ずっと聞いているだけだった遠坂も出口へと向かう

こいつも同じ空間には居たくないんだろう
俺が、扉の取っ手を握り開けようとした瞬間――

「待ちたまえ」

と、呼び止める言峰

「……なんだよ。まだなんかあるっていうのか」

「……………」

じっと俺を見据える

無言のまま、何も言わずに

「……話がないなら帰るぞ」

無視しようと背を向けて再び開こうとした

「――喜べ少年。君の願いは、ようやく叶う」

なっ……！

「『衛宮』を、正義の味方を継ぐと決めたのだろうか？ ならば喜べ。君が待ち望んだ『悪』は、すぐ手の届くところにある」

「っ———！」

「判っていたはずだ。明確な悪がいなければ君の望みは叶わない。たとえそれが君にとって容認しえぬモノであろうと、正義の味方には、倒すべき悪が必要だ。サーヴァントは魂食い。人を食えば食うほどに力を蓄えるモノたちであり、そうした手段に出ない理由はない。これほど分かり易い『悪』は無いだろう。遠慮なく断罪したまえ」

その言葉は、俺自身が気づかなかった自分の本心を暴き、決ったつまり、言峰はこう言っているわけだ

『敵が出来てよかったな』と……

俺が持つ最も崇高な願いであり、俺を形成している根幹とも言える信念

悲しむ人の涙を止める人になりたい

ただ、あの地獄から、救い出された時から始まった純粋な願いだその願があるからこそ俺は生きているといっても過言ではない

だが、言峰は、それを最も醜く汚らわしい望みと同意であるという

……そう。何かを守ろうという願いは、

同時に、何かを害そうとするモノを望む事に他ならない……………

「あつそ。だったら悪かったわ。前言撤回する」

「……………武蔵？」

俺の肩を持ち、真っ直ぐ言峰をその眼で捉えて何かに挑むかのように強い語気で言葉を繰り出す

……何を言うつもりだ？

「お前の今言った事が正しかったら、お前を神父っぽくないとは言えねえな。お前はこの世の誰より神父らしい、最高の神父だ」

「……ほう、そう言ってくれると私もいくらか救われる。感謝の念を記そう」

「いいってことよ。……………あ、言い忘れてたけど、俺も聖杯戦争にでるから覚えとけ」

「そうか。友のためにその身を捧げるとは、その行為には敬意を払うべきだ。素晴らしい、とだけ言っておこう。私も見習わなくては

な」

「言ってる。んなこと微塵も思ってたねえ癖に」

憎々しくしげに手を振りながら外へと出ていく

仕返しとばかりに、その扉を蹴破りながら

その様子をみて、俺と遠坂は慌てて武蔵の所へ駆け寄る

「なあ、さっきのどう言う意味だ？」

「あ？何のことだよ？」

ある程度、教会から離れてからさっきの武蔵の言葉について質問する
あんなに言峰は神父っぽくないって言ってた奴が意見を翻すとはど
ういうことだ

「惚けないで。綺礼のようなやつを神父なんて言えないわよ。どう
いうことなのかしら？」

「あああれか……なんてことはねえよ、ただの言葉遊びみたいなも
んだ」

言葉遊び……？

武蔵の言ってることに理解が追いつかない

それは遠坂も同感のようで、首をかしげている

「えーと、なんだっけ。総括すると『正義の味方になるという夢は悪の出現を望むに等しい』ってことか？」

「……………それがどうしたんだ？」

「そう考えることが屁理屈なんだっつもの。バカらしくて相手にできねえ」

……………俺が今悩んでいることを『バカらしい』って……………結構真剣に考えてたんだけど……………

「屁理屈？　どういうことよ？」

「……………え？　分からねえの？」

「分からないからこっちに聞いてるんだ。はぐらかさないで答えろよ」

「……………いやあのさ。

警察官になりたいやつは犯罪者が増えることを喜ぶのか？

消防士の夢を持ってるやつは火事が多発するのを嬉しがるか？

医者を目指するやつは患者が増えるのを望んでんのか？」

「……………あ」

「それはどうしようもなく増えるから対処したいってだけの話じゃねーのか？ あんなの詭弁にもほどがあるわ」

……………うわあ、確かにそうだ

そんなことを言ったらこの世の仕事は悪どい目的を持ってることになってしまう

あんなの、側面だけを捉えて悪い事のように言ってただけだ

「……………そういうことよくすぐに思いつくわね」

「こんなの、あいつがなんとなく言ってみただけだろうし、気にするのが負けだ。とっとと忘れちまえ」

「じゃあ、あの『最高の神父』っていうのは？」

「そのまんまだ。じゃあ士郎、神父の仕事ってなんだ？」

神父の仕事……………？

ミサを行うとか、教義を伝えるとか…………

そういうことではないんだろう、武蔵が尋ねていることはもっと根元にあること……………というか

これらの行為の全ての目的は……………

「悩み困っている人を救うのが仕事……か？」

「そうだ。少なくとも俺はそう思ってる」

予想は当たってたらしく、我が意を得たりと指を指す
つまり、これを裏返すと……

……とんだ皮肉になるな……

「あいつの言う理論の中での最高の神父ってのは、人が悩んでたり
困ってたりする人間が増えるのを喜ぶようなやつってことだよ」

それを聞いて合点がいった

第五話、良い子は早めに就寝すべき。そうじゃないと背は伸びない

side

士郎

「シロウ。話は終わったのですか？」

武蔵が言峰に対する皮肉を言った直後に、セイバーが心配そうに俺の方に駆け寄ってくる

言峰のワケの分からぬ重圧もそれで少しは紛れてくれた気がする

「ああ。終わった。事情は嫌って言うほどわかった。聖杯戦争の事も、マスターの事も、な」

「それじゃあどうするんだ？なんならお前がこの戦争を降りても文句は言わないが……」

マスターが、セイバーの後ろから俺に挑むかの様に真っ直ぐ視線を向けて問いただし始める

それは先ほどの嫌々従うといったものではなく、真剣に俺の決断を尊重しようとしているのがわかった

恐らく彼は、俺が決めた方に賛同してくれるのだろう

決意は固まっていた

あんな、俺の見過ごせない話を聞かされたら、見て見ぬ振りなんてしていただけるはずがない

何が起こっているのか、何が俺の身に降りかかっているのかは教えられた

幸い、俺には止められるだけの手だてがある

ならば、彼らの力を借りて戦うだけだ

絶対に、俺みたいな悲劇は繰り返させない

それが俺の……俺自身の望みだ

「……俺は戦うよ。マスターとしてこの聖杯戦争に参加すると決めた。こんな半人前で悪いんだけど、最後まで俺と戦い抜いてくれるか？セイバー、マスター」

絶対に俺みたいなの、俺が助けられなかった人達みたいな犠牲者を出すわけにはいかない

この戦争自体を止めることは大凡不可能に近い

だが、せめて少しでも犠牲者を減らせたり、原因の大元を潰すことが出来ると言うなら、戦う理由になりえる

そのための力はここにあって、あの時の様に無力であることはないのだから

「もちろんです。私は貴方の剣、そう誓いました。貴方が戦うというのなら、それに従います」

「それがお前の決めた道なら、従者たるサーヴァントの俺には反対する理由がない。これからよろしく頼むぞマスター。折角お前をマ

スターと認めたんだ、精々死なないでくれ」

そう、セイバーとマスターは宣言してくれた

セイバーのその声には一切の迷いは無く、真っ直ぐにこちらを見つめる瞳は、先刻の宣誓の時と同様

疑念を抱かせることは全くない

マスターはマスターで、どこか俺を試すかのようなかいを含んだ口調ではあったが、俺と共に戦ってくれることを明言してくれている

先ほど言峰が言ったように、この二人が『悪』であるようには見えない

そんな単純なことで、俺はまた安堵してしまう

「……そうだな……そうだった。セイバーとマスターがそう言うってくれると、俺も助かる」

そうして、一呼吸置く

深く息を吸い込んでから、改めてセイバー達と向き合う

改めて見て、これほどに心強い奴らが味方になってくれることに感謝して、手を差し出す

「それじゃ、握手だ。これからよろしくな、セイバー、マスター」

方向性だけは決まっているが、どのようにしたら正しいマスターとサーヴァントの関係を築けるのかは分からない

それでも、これから一蓮托生となるセイバー達となんの挨拶も無しというのは味気ない
だから、せめて挨拶ぐらいはちゃんとしておきたかった

「ああ、やるからには最後まで勝ち抜くぞ。………まあ、まだお前は半人前もいいところだから無理はするな。サーヴァントとの戦闘は俺達に任せておけ」

「……………言われなくても分かってるさ。半人前にも達してないことぐらい自覚してる」

でも、自覚してることを指摘されると、なんだかムツとする
そもそも、マスターとサーヴァントでは圧倒的な戦力に差があるんだから勝負にすらならないだろう
そんなものは分かってはいるものの………なにか歯がゆい

「いや、お前に不満がある訳じゃ無いんだ。強いて言えば魔力量が
少ない位で、今のところは問題はない。ただ、お前が死んだら俺達も負けることは肝に命じて置いて欲しい」

「そりゃ分かったけど……」

マスターが、生暖かい視線を向けてくる
………そういう風に言われると、俺がバカみたいに思えてきて余計に
落ち着かない
だから、少し俺もからかうように返事する

「あれ？さっきまで『降りてもいい』って言ってなかったか？負けるとかはお前は気にしなくてもいいってことじゃないのか？」

「いや、勝負だから出来れば勝ちたいだろ？でも聖杯自体には興味は無いから負けても文句は無いんだよ」

「…………お前にとってこれはスポーツみたいなものなのか？」

「……まあ、そうかもな。ある意味スポーツだ。死んだ身からしたらこんなもの娯楽と何も変わらない」

「デメエ？」

こんな……こんな非道な勝負をスポーツ扱いだって？

いや、それでも私利私欲のために赤の他人を襲う様なやつよりかは遥かにマシだが、こいつの台詞からは『聖杯戦争がどうなるうが知ったこっちゃない』みたいなニュアンスを感じてしまう

お門違いとは分かっているものの、こちらは必死でやろうとしているのに、その飄飄としているのには疑問を感じる

——なんだか、俺の決意をバカにされた気がしてしょうがない

俺は胸ぐらを掴もうと手を延ばしたが、それをはたきおとされ、そのまま頭に手を置かれた

それは聞き分けのない子供を諫めるようだった

「…………何か誤解してるみたいだな」

「何がだ？」

「別に、俺は関係ない一般市民を巻き込むつもりはない。いや、むしろ巻き込むこと自体間違っていると思う」

「なっ……？」

「それでも俺だって『英霊』なんだぞ？生前はそれほど英雄らしいこともしてないけど、こういうことは放っておけない気質でね」

穏やかな笑みを浮かべながら俺を諭してくるマスター

その目には、本気であることを窺い知れるほどの決意を浮かべているにも関わらず

「享楽に過ぎないものだが、それに本気で打ち込む人間だっている事くらいお前でも知ってるだろ？スポーツという表現が的確だったから採用したただけだ。そんなに深い意味はない」

「……………」

「俺は出来る限り被害者が出ない様にはしたいと思っている。………自分で言っても甘いつて感じるけど」

「……そんなことはないさ」

マスターのまっすぐな目を見て、俺は気圧されてしまい、声が出な

かった

………本当なら、声高に『違う？』と叫びたかった
それは、完全に俺の考えと一致していたから

――でも、言えなかった

俺が、一瞬でもマスターを勘ぐってしまったことが罪悪感となり、
大口を叩けなくなってしまった

――そうだった、マスターは俺に対して『俺自身が聖杯戦争に出るか』だけを聞いていた

一回たりとも『自分は聖杯戦争に出たくない』とはマスターは言っていないという事実は今更気付いた

こいつはもしかしたら『俺』さえも『関係ない一般市民』とでも捉えていたんじゃないだろうか

聖杯戦争に望んで参加した訳ではない、半ば強制的に巻き込まれた被害者と考えていたんじゃないだろうか

だから、俺の決意を聞くまではなるべく巻き込まないように遠ざけようとしたんじゃないだろうか

――そして、自らの意志で参加を表明したからこそ、俺をマスターとして扱ってくれるんじゃないだろうか

そのとき、俺は直感した

数多くいる英霊の中でも、こいつほど俺の理想に近い奴はいないだろう。ということ

こいつとあれば、『正義の味方』へと至る切っ掛けが掴めるんじゃないだろうか

そして、その考えに至ったとき、俺はこいつに対する疑念は消え去り、純粹に尊敬の念が湧き上がってきた

「そっか、俺のマスターの意向とそぐわなかったらどうしようかと思っただけだが、異論はないみたいで嬉しいよ」

「……こっちこそ、お前にマスターだって認められてよかった。…本当に、未熟者の俺には勿体無いくらいだ」

「気にするな。多少困難な状況だろうと生き残ってきた身だぞ？俺が戦うときの要求なんてマスターが友好的であることくらいだ。それ以外は望まないさ」

言外に、俺のことをへばいマスターだと揶揄しているが、今の俺にとってさほど気にすることでもない
むしろ、いつか認めさせてやる。くらいのやる気が出てくるくらいだ

「それじゃあマスター、この聖杯戦争を勝ち残ろうじゃないか。…ま、それなりには期待してるぞ？」
くだらないスポーツ

「言ってくれんじゃねえか。その言葉、後悔させてやる！」

俺はマスターと握手して、俺の決意が伝わる様に固く握った
それをして、マスターに、フツと笑われたが構わない
絶対にマスターに見合うだけの力をつけてやるさ！
そして、握手を解き今度こそ教会の出口へと足を運ぶ

……………あれ？

誰か忘れている様な……………

「シ、シロウ？私のことを忘れてませんか？」

「あ……………」

ふと横を見ると、もう見るからに不機嫌そうなセイバーの姿があった
……………そういえば、セイバーとはまだ会話してなかったな
それで不機嫌になってんのか……………？

……………やっちゃったアアアアア？

しまった！これから苦難を共にするセイバーに悪印象を与えてどう
する！

なんとか関係を修復しないと……………？

「ご、ごめん？ついマスターと話し込んでちゃって……………」

「私なんか眼中に無いってことですか？……………もういいです？私
なんて結局ボロ雑巾の様に使われるくらいの替え玉程度にしか思わ
れてないんです？」

「そんなことは無いって？セイバーだって頼りにしてるぞ？いや本

当に？」

「なんですかそのとってつけた様な言葉は？全然言葉が思いつかなかったんでしょう？」

「そ、それは……」

必死で取り繕おうとしているが、一度曲がった臍は中々戻らないらしく、強気な口調だったセイバーの声が徐々に小さくなっていき、隅っこで地面にのの字を書き始めた

「……………いいんです。どうせ私の見た目が弱ちく見えてしまうのがいけないのです……………そういえばシロウが私を召喚したのも不本意だったらしいですし……………どうせ私がいなくても、代わりはいるんです」

「ちょ、ちよっと？」

本当に異性って難しい？

武蔵だったら簡単に機嫌をよくできるのに

一体どうしたら……

強気で心の内を吐露するのがいいのか……………でも、恥ずかしいし……………ええい！ままよ？

「……………どうせ、私は必要ない存在なのです……………」

「そんなことはない！俺はセイバーが必要ないなんて思っていないぞ？」

「……………え？」

「いや、むしろセイバーは俺に必要なだ？お前がいない状況なんて考えられない？」

「あ、あの…………」

「これから苦楽を共にする仲間なんだろう？そんな悲しいこというなよ？」

「シ、シロウ？」

「お前のことを気にかけてやらなかったのは俺が悪かった？でも、それでも俺はお前がパートナーで良かったと思う？」

「そ、そのへんで…………」

「もう一度言う？俺にはお前が必要だ？だから、俺についてきて欲しい？頼む？」

「え、えーと…………」

「…………どうだ？俺の本心を包み隠さず言っただが…………」

これでダメなら、俺はどうすれば…………

最後に頭を下げながら頼み込んだから今はセイバーの顔が見えない…………顔上げるの怖い

余計なことを言ったせいで、斬り殺されたり……

「シ、シロウの熱意は伝わりました……しかし、そのような言い方はするべきではないと思います?」

「?セイバー、様子が変わだぞ」

そっぽを向きながら、やたら語気を強めて指摘するセイバー
なにかあったのか?

それはさておき、なんとか機嫌は治ったみたいだ
いやーよかった

「つく……まさか、このようなことを言われるとは……」

「へ?なにがさ?」

「やっぱり自覚無しかテメエエエエエ?」

「ガフっ?へブウ?……な、なにすんだ武蔵?」

何故か顔をほんのり染めてこちらをチラチラ見てくるセイバーに疑問を抱いた

しかもボソボソなにか言ってるし………初めてってなにさ?
とかなんとか思ってたなら、横脇腹に鋭い痛みが襲ってきた
………つか武蔵だ。武蔵のドロップキックだ

五回ぐらい転がって、起き上がり様に文句を言う

「士郎？ガキのお前でも分かりやすく説明してやる？今は一体どういうシチュエーションであるか考えながら一回さっきのお前の台詞をよーく反芻してみろ？とんでもねえこと言ってるのに気付くから？」

「え？……えーと………」

俺にはセイバーが必要だ。とか俺についてきて欲しい。とか苦樂を共にするとか………

別に問題ある発言ではないんじゃない？………

だとすると、男女間で言ったからか？

もしかして、教会の前だから？

………ん？

『俺にはお前が必要だ』発言
それを男が女に力説している
しかも、教会の前で………

………もしかして、

「プロポーズ………か？」

「『プロポーズ………か?』じゃねエエエエエ? テメエの口はどういうふうにできてんだアアア? よくもまああんなプロポーズ紛いのことをポンポン言えるな? テメエはなんだ? エロゲか? エロゲの主人公か?」

「な……っ? 失礼なことを言うんじゃない? 俺は本心を言ったただけだ? それを言うなら武蔵だってそれに近いこと言ったりすんじゃないかよ?」

「ざけんなよコンチクショウ? 言ったところでも起こらないのが俺なんだ? 全部冗談って受け止められちまうもの?」

「どやかましい? 俺は女子と仲良くなりたいたいと思って言ってる訳じゃないんだぞ? それなのになんであれこれ言われなきゃならない?」

「だったら一回自分の発言がどう言う影響を与えるかを考えてから発言しやがれエエエエ?」

「……………シロウ? そうなんですか?」

「……………あれ? セイバーさん?なんでそんなに怖い顔をしていらっしやるんですか?」

少し恐ろしいですよ?

なんかこう……昼ドラ的な怖さが……

そのまま命の危機を感じ取っていたら、向こう側をむいて、ワザとらしく大声で話し始める

「……ふんっ！まさかシロウがここまで軟派な人間とは思いませんでした！聖杯戦争のマスターになるならそれなりの態度をとっていただきたいものですね？」

「……態度ってどんなだよ？俺は俺なりに結構考えてるんだぞ？明日の晩飯どうしようとか、お前らの就寝場所はどこにしようとか、その鎧やらタイツやらどう洗濯したらいいとか……」

「思考が完全にマスターというよりもお母さんのものになってますよ？」

「つつても使える魔術もへばいやつだけだし……俺に他にできることなんて盾になるくらいしかないんだけど……」

「シロウが盾になったら本末転倒ですからね？無茶はしないでくださいよ？」

「じゃあ魔力とかか？俺言うほど多くはないからな………あ、魔力量が多いし武蔵に代わってもらうか？」

「そこに関しては、普通の戦闘を行う程度ならなんとか対処できます？ですからムサシのサーヴァントになるのだけはご勘弁を？」

「……………傷つくぞコノヤロー」

セイバーが武蔵のサーヴァントは嫌だ発言をして、雨雲を背負う武蔵まあ傷つくよなあ、人格否定されたみたいでセイバーのことだから、武蔵がマスターになったら疲弊度が高くなるだろうからな

それを考えると、武蔵はちょうどいいサーヴァントを引いたと思う

片方は、武蔵に話を合わせられるぐらい気さくな青年

もう一人は、武蔵の行動に振り回されないで、ただ忠実な青年

うん、聖杯も中々いい仕事をするじゃないか

「つつても、武蔵は本当に多いぞ？俺の何十倍もあるくらいだし、セイバーが全力を出すなら……………」

「ご安心ください。若干ステータスが低くなっていますが、マスターというサーヴァントもいるお陰で総合的には高くなっています。これは大きいアドバンテージです」

「それでもさ……」

やはり、本気で戦える方がいいんじゃないだろうか？

セイバーというのは最良のサーヴァントと聞く

それこそ白兵戦なら負けることなしと言われるほどに

こんな俺みたいな半人前にも達していないマスターでいいんだろうか

「それに、私はシロウを裏切るような真似はしたくない。私は貴方の剣、そう誓ったはずですよ？」

分かってますか？と言うかのように俺に微笑むセイバー

その微笑みは、まるで聖母の絵から切り出したかのような穏やかな笑み

このどこまでも俺を信じていると分かる態度を見て、さきほどの悩みがちっぽけなものに見えてしまうほどに
……………少し、いや、結構見惚れてしまったのは秘密だ

「そっか……………それなら握手だ。さっきはしてなかったし、ちゃんとした形で……………な？」

「ええ。よろしくお願いします。シロウ」

「はいはいはいはい？もう終わり？これ以上やってもイチャイチャしてんの見せられるだけだからな、とっとと帰るぞ？これ以上乳繰り合うのを見てるのは苦痛だ」

「「だ、誰が夫婦漫才なんかやってるって言うんだ？（ですか？）」
」

「息ピッタリですなあ……………リア充爆発霧散しろ」

武蔵が手をパンパン叩いて制止させてからの皮肉
夫婦じゃねえってのに、いらない事ばかり言いやがって……
そんな、すったもんだがあって俺達はようやく教会から出ていった

「……………なあ士郎。こっちの道から帰らないほうがいい気がするんだけど……………」

「なんでさ？ 回り道すると帰る時間が遅くなるぞ」

「いやまあそうなんだけどさあ……………」

教会からの帰り道、その道中で先ほどのやり取り以降、目立つ会話もなく、教会前の坂を下り、道が平らになった頃に武蔵が何かを言い出した

何故か武蔵はこの道を行く事に気が進まないようだが、理由が漠然としている

武蔵もあまりに曖昧なものから言ったせいかな、すこし思案しながらも引き下がる

「……………うーん。遠回りしたほうが良いような気がするんだけど、それをする余計に面倒な事になりそうな気も……………」

「ここまでね。あとは貴方たちだけで帰って」

「……………はあ？」

そのブツクサ言ってる横で、突然遠坂が宣言した
こんな夜中に遠坂が別れて帰るだど？

なんでさ？

帰る道は同じじゃないか

同時に疑問に思っただ蔵と声が重なった

「あんた達ね……どうしてか分からないのかしら？」

「分からないから聞いてるんだろ？」

「分かってるから聞いてるんだろ？」

しかし、次に出た言葉は真逆の意味を持っていた
「……か武蔵分かるのか？」

無駄に学習能力高いからなあこいつ
でも、分かるからこそその疑問ってどう言う事だよ

「お前のことだ。これから他のマスターでも探しに行こうとしてんだろ？ あんまり無駄すんなよ」

「……………忠告とは余裕ね。でも断るわ。せっかく新都まで来たんだから、ただで帰るのは勿体ないもの。あんた達とは違って、私はこの戦争に積極的に参加していくつもりだし。……今日の分の恨み他のヤツにぶつけないと気が済まないわ」

すごく分かる気がする

そのやり場のない怒りっていうのは

なんせ、マスターの分もあるだろうが、その大半は武蔵にあると簡

単に予測できるからだ

「だから、ここでお別れ。次会ったら、全力で潰すから。これ以上一緒にいてもお互いやりにくくなるだけでしょう?」

……つまり、それは俺たちに対する忠告ということか?

しかも、やりにくくなるって言ってる辺り、情に流されやすくもあるのだろうか

……なんだ、つまり遠坂は

「――ああ、遠坂、良いヤツなんだな」

「は? 何よ、突然。おだてたって手は抜かないわよ」

「知ってる。けど出来れば敵同士にはなりたくない。俺、お前みたいなヤツはs「はいストップうううううう?」」

好きだ。と言いかけたとき、武蔵によって口になにか放り込まれた一体何をするんだ、と文句を言おうとしたが、それは叶わなかったその放り込まれた『何か』によって、一瞬にして口の中の神経が麻痺したから

この辛い――いや、むしろ痛い形容すべきこれは……………

――思考はこのように正常なのだが、俺の体は脳とは直結してないらしく、まあつまりは……

「んのオオオオオオオオオ？ウゴベっ？がっ！辛いイイイイイイイイ？みつ！水ウウウウウウ？ゲホッ？」

あまりの辛さに咽せてしまったわけで
その『何か』っていうのが、さっきの麻婆豆腐なわけで
俺の口が死んでるわけでエエエエ？

「まったく、いい加減懲りろよ。……悪いね遠坂、士郎がまたお前に
フラグ的なものを立てそうになって……」

「気にしないでいいわ。私も言われてたとしても、さっきのあの状
況から考えたら『なんだ、またか』って思って適当に流してただろ
うから」

「……………はあ、士郎は何でこうなっちまったんだ？」

武蔵がその自販機でミネラルウォーターを買ってこっちに投げよ
こす

あわてて俺はキャップを捻り、中の水分を補給する
……はあっ！はあっ！死ぬかと思った……

「とにかく、セイバー達がやられたら、教会に駆け込みなさい。そ
うすれば命だけは助かるんだから」

「あ、ああ……気が引けるけど一応聞いておく。けど、どう考えて
も、俺の方がセイバーより短命だぞ」

「……はあ」

盛大な溜息

また俺はずれた事を言っただろうか

「いいわ、これ以上の忠告は本当に感情移入なっちゃうから言わない。精々気をつけなさい。いくらセイバー達が優れているからって、貴方がやられちゃったらそれまでなんだから」

そうして、遠坂が振り向き歩き出す

だが、彼女の足はあたかも凍り付いた様にぴたりと止まった
その目の前には小さな影

「——ねえ、お話は終わり？」

幼い声が響いた

歌う様な、はっきりと通る声

そして、いつのまにか晴れた空に浮かぶ煌々と輝く満月に照らされ、
異形の化け物が一匹

その隆々たる体躯

鋼鉄の体

迸る威圧感

そして――死の気配

それだけで一瞬で分かった

こいつはマスターなんだという事に

そして、このサーヴァントはヤバイということに

幾たびの戦場を経験すれば、対峙するだけで相手の強さが分かるという話を聞く

もちろん俺は、死線をくぐった訳でもないし、強敵と巡り合ったこともない

そんな俺でさえも、こいつは規格外の強さだという事実を認識できるそれは、俺が強さを感じ取れる域に達したという意味ではなく、相手の持っているものの全てがその体のうちに封じ込められず、俺にその脅威を感じ取らせている

そんな格の違いを押し付けられた。というところだろうか

「……………おいおい嬢ちゃん、もう良い子は寝る時間だぜ？そのやたら屈強なボディガードを連れてお家に帰んな」

「心配してくれてありがとう。でも、それより前にしなきゃいけない事があるの」

武蔵の軽口を、その文字通り軽く躲して遠坂のほうに向き直る

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォ
ン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン——」

その名に遠坂が絶句する

所縁でもある名前なのか、驚いた表情を浮かべた

「三人とも、下がって下さい」

セイバーは雨合羽を脱ぎ捨て、俺達の前に立つ

あの化け物を相手にするには、全霊を賭さねばなるまい

「……………アーチャー、援護を頼む。こんな状況だ、今のところは
手を組もうぜ」

「マスターの言うとおりよ。貴方の本来の戦いに徹しなさい」

「ふむ…………たしかに前線が多いな。承知したマスター」

マスターがアーチャーに提案し、遠坂がそれに同調する
アーチャーは遠坂のほうの意味で『マスター』という言葉を使った
んだろう

マスターのことは嫌いみたいだから
言い残すと、刹那の間にアーチャーの姿が消えた
射撃するのに相応しい場所に移ったようだ

「さーて……さっきの戦いの不完全燃焼分、ここで晴らさせてもら
うぜ？こいつは菌ごたえがありそうだ？」

「ムサシ様、下がっててください。こいつと戦うとなると、巻き
込まない自信がありません」

「……リョーカイ。いいか、負けんじゃねーぞ？」

「へっ！たりめえだ？」

「承知致しました？」

ランサー達は、これほどの相手であつても怯むことなく巨人へと相
対する

方や、自らの戦いへの欲望を満たすため
方や、自らの主君への忠義を果たすため
二人の槍は、真っ直ぐ脅威に向けていた

「……頼んだぞ、セイバー、マスター」

「ああ、任せておけ。俺がどの位のものかを示す良い機会だ」

「ご安心を、我が命に変えてもシロウをお守りします」

マスターは陰陽剣を取り出して、散歩でもいくつかのような口調で返しセイバーは何も持っていないような手を相手に向けて、真剣な口調で返す

セイバーが剣を持ってこないというへまを犯す訳がない
恐らく、見えざる剣を持っているのだろう

「相談は済んだ？じゃあ始めてもいい？」

その風貌の通り、我慢できないのか待たされた不服を声色に滲ませながら問うてきた

しかし、少女は俺達の陣形が整うまで待っている

つまり、それだけ相手は自分のサーヴァントに絶対の信頼を置いているということ――？

「――じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

その言葉と共に、黒の巨人は弾丸と化した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5002u/>

Fate/stay night――とある運命の物語

2011年10月8日19時52分発行